筑波大学新聞

第328号
編集責任
筑波大学新聞
編集代表
福原直樹
TEL: 029(853)2040・6699
E-mail shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市天王台1－1－1

紙面から

柳沢正史教授 紫綬褒章受賞	2
筑波学生文芸賞 第9回募集開始	5
女子バド 関東大学リーグ戦3連覇	8
男子バスケ 関東大学選手権優勝	9
G7科学技術大臣会合 応援イベント開催	10
つくばに街灯を 設置を喜ぶ声多数	11
ミニ特集 GPA評価点 なぜ引き上げ？	3
特集 注目集める障がい者スポーツ	6,7

熊本地震

筑波大教員が支援活動

被災者の心のケア行う

被災者との対話を通して、心のケアを行う根本講師（左）ら
（4月27日、熊本県阿蘇市の旧古城小学校で）＝同講師提供

4月の熊本地震を受け、茨城県は筑波大学の教員をリーダーに、被災地での精神医療を行う3組の災害派遣精神医療チーム（DPAT）を派遣した。4月21日～25日まで派遣された第1陣は筑波大の高橋晶准教授（医学医療系）が、4月27日から5月2日までの第2陣は根本清貴講師（同系）が、5月2日から8日までの第3陣は大刀川弘和准教授（同系）がDPATのリーダーを務めた。（徳永爽＝日本語・日本文化学類2年、小宮山瑛生＝社会学類2年）

DPATは、東日本大震災時に精神医療の全国的な支援体制がなかった教訓から、厚生労働省を中心に都道府県で組織が進んでいる。大規模な災害が発生した際は、被災地や厚労省の要請で、各県が組織的にDPATを派遣する。茨城県からのDPAT派遣は今回が初めて。

第1陣は県立こころの医療センター（�市旭町）の医師を兼任する高橋准教授を始め、同センターの看護師や精神保健福祉士など4人で構成。主に熊本県阿蘇地域の西原村の避難所などで被災者の心のケアを行った。

また第2陣は根本講師のほか筑波大附属病院の看護師長など5人。第1陣の活動を引き継ぎ、阿蘇地区および熊本市内の避難所の巡回などを行った。

現地から帰ったばかりの高橋准教授は今回の活動について「被災者の多くは大切なものを失い、慣れない避難所生活を送っている。そうした中での心の不調について、対話を中心に活動した」と話し、「東日本大震災ではDPATが整備されていなかったため、素早い現地入りとチームでの対応ができなかった。今回、全国の各県から派遣された精神医療チームが組織的に支援できたのは今までとは違う点だ」と語った。

今回派遣された高橋・根本両教員は、昨年9月に発生した茨城県常総市での水害でも、被災者支援に従事した。

根本講師は「常総市での活動で、被災者の心のケアについて学んだ。また、市の職員などは避難所の運営など大変な業務を行っているが、彼らも支援者であると同時に一人の被災者。職員らの精神状態にも気を配る必要があると気付いた。今回の活動ではそうした点を生かせた。これからも長期的な支援を続けていきたい」と話した。

学内外で募金活動も

熊本地震を受け、筑波大学で熊本県人会を中心に義援金を集める活動が4月21日から5月7日まで行われた。集まった義援金は30万円近くに上り、熊本県の口座を通じて復興支援にあてられる。

最大震度7を記録した益城町の隣町、嘉島町出身の熊本県人会の小林健史さん（地球環境2年）は募金活動の中心の一人。その活動のきっかけは、実家が被災し全壊したことだった。

小林さんは「最初は家族と連絡が取れず焦りが募った。だが家族の安否を確認し、少し落ち着いた時に、何かできることはないかと思った。県人会で話したところ、多くのメンバーが共感してくれ、募金活動に参加した」と語り、「多くの方の協力で、非常に多くの募金が集まった。心から感謝している」と話した。

一方、筑波大内で募金したある学生は「被災地が遠くボランティアには行けないが、募金で協力した。復興に向け、少しでも力になれたらうれしい」と話した。

同会は筑波大内での募金活動を5月7日に終え、5月11日にほつくば駅前で活動を開始。駅前での活動時間は18時頃から20時頃まで、5月20日まで続ける予定だという。

熊本県人会員による募金を集める活動の様子（4月21日、第三エリアで）＝徳永翼撮影

筑波大に期日前投票所

夏の参院選から

今夏の参議院議員選挙から、つくば市は筑波大学構内に期日前投票所を設ける。同市はつくば駅前の「B1Vーつくば」（つくば市吾妻）にも期日前投票所の設置を決めており、今夏の選挙では市内に2カ所設けられることになる。18歳に選挙権が引き下げられる初の選挙に向け、筑波大生の投票率向上が期待される。筑波大での期日前投票所の設置をめぐっては、筑波大の一部学生が市や大学に求めていた。（大西美雨＝社会学類3年）

大学生と政治

つくば市によると、筑波大の期日前投票所は教室や大学会館などを利用し、平日の午前1時～午後7時に開く考え。一方、つくば駅前の期日前投票所は週末や休日に開かれる予定で、双方が補完する形で投票率向上を狙う形だ。筑波大の投票所では、選挙の立会人を筑波大職員や筑波大生が行う案が出ており、筑波大生以外も投票できる。

これまで筑波大では山寺恭平さん（社学3年）らが学内に投票所を設置するよう求めていたが、当初、市は駅前だけに設ける予定だった。

だが、2013年の参院選で松山大（松山市）が学内に期日前投票所を設置したのを皮切りに、15年春の統一地方選では全国9自治体12大学で設置。今夏の参院選では茨城県内で茨城大（水戸市）や流通経済大（龍ケ崎市）なども設置が決まっていた。つくば市では昨年10月、山寺さんが中心となり、学内への設置を目指すT・ACTを発足。今年2月には永田恭介学長を訪問、期日前投票所の設置の許可を求め、大学も了承した。また子どもを持つ親たちが市に筑波大内での設置を要求。市によると、今回の設置はこれらに応じた形だという。

期日前投票所は、選挙当日に仕事やレジャーなどで投票できない人が対象。各地方自治体の選挙人名簿に登録されており、本人確認ができれば誰でも選挙日前に投票できる。

今回の決定を受け、筑波大の玉川信一副学長（学生担当）は「筑波大生の投票率の低さが報道で指摘される中、当事者の筑波大生が働きかけ、期日前投票所の学内誘致を進めたことは非常に意義がある。より多くの筑波大生が投票所に足を運ぶきっかけになってほしい」と話した。

（10面に関連記事）

◆　◆

政治離れが進む中で、筑波大生はどう政治と関わっていくのか、報じます。

野球の動作を緻密に分析

硬式野球部監督
川村卓准教授

筑波大学の川村卓准教授（体育系）は野球のプレー時の動作を分析し、どのような動作が合理的で良いプレーにつながるのかを研究している。研究成果は自身が監督を務める筑波大硬式野球部の指導や実戦に生かしており、部員全体の技術向上やけがの防止につながっているほか、昨年から投手に転向した部員が著しい成長を見せるなど、研究の実践が着実に成果を上げている。

川村准教授の研究は、ハイスピードカメラや赤外線カメラで野球選手のスイング時や投球時の動きを撮影し、その画像データをもとに筋肉や関節の動きを分析するもの。動きを棒人間で表した「スティックピクチャー」と呼ばれる手法で、投手や打手の細かな関節の動きのみを確認しやすくすることで、体幹の崩れなどの動作の改善点を見つけ出し、指導に生かす。

川村准教授はプロ野球選手を中心にどうした動作分析を行っており、これまで各球団のキャンプ場に赴き、一人ひとりの選手の動作分析を進めてきた。また同様の方法で硬式野球部の部員らのプレーの分析も実施。プロ野球選手の分析で得た莫大な動作データと、同部の部員たちのデータを照らし合わせ、部員一人ひとりに合う指導を行っている。

研究が実際の指導に大きく役立った例が、現在投手として活躍する大道寺拓さん（体専3年）。昨年8月に野手から投手に転向した際に、多数のプロ野球選手の動作データを参考にして、大道寺選手の体格やプレースタイルに合った投げ方と練習法を指導した。結果、転向から約半年で、球速を約8キロ上げ著しく成長した。

野手としての成長に行き詰まり、悩んだ末の転向だったが、現在は主力投手として、多くの試合で活躍している。川村准教授は大道寺選手は投手としての才能を一気に開花させてくれた。研究の成果が確実に表れている」と語る。また「今もデータ分析を続け、より正確なデータをもとに実際の指導や試合に研究成果を生かしていきたい」と話した。

（前名裕一＝社会学類2年）

筑波おろし

三菱自動車の燃費試験データに関する不正が問題となっている。燃費を実際より5～10％よく見せるためにデータを改ざんしていたというのだ。同社は大手の中では販売台数も少なく、トップが成果を求めるあまり、現場に圧力をかけたことが、不正の原因との見方もある▼自動車の修理工だった今は亡き祖父が、この不正を聞けば嘆いたと思う。祖父は読み終えた新聞の端もきっちりと合わせる几帳面な性格で、丁寧で正確で、偽りない仕事ぶりで有名だった。一つひとつの仕事に時間をかけたため、修理工の仕事はあまりお金にならなかったが、自分の仕事をしようとしていたことを感じとれた。祖父の人間性に学びたい。

大学や研究機関で研究不正が相次いでいる。データの改ざん。論文の盗用……。研究者がどのような経緯で不正に手を染めたのかはわからないが、「発覚しない」という慢心があったのかもしれないし、研究資金の獲得や成果を求める圧力があったかもしれない。4月には筑波大学でも論文盗用が発覚した▼学類生の自分も、2年後には卒業論文を書く。日本の近現代の庶民文化について勉強し、書きたいと思うが、さまざまな資料を調べ、真摯に、そして自分の納得する限り探求し続けたい▼祖父は無口だったが、その後ろ姿から顧客の安全を第一に考え、常に最良の仕事をしようとしていたことを感じとれた。祖父の人間性に学びたい。

柳沢教授に紫綬褒章

筑波大から３人目

睡眠障害の原因解明で

政府が4月28日に発表した「紫綬褒章」に、柳沢正史教授（国際統合睡眠医科学研究機構長）が選ばれた。同賞は学問や芸術の分野で優れた功績を残した人に贈られるもので、柳沢教授は睡眠と目覚めに関する基礎研究などの成果が評価された。筑波大では2014年の関口章教授（数物系）に続き現職時の受賞では3人目となった。

柳沢正史教授

柳沢教授は筑波大学大学院に在籍時の1988年に高血圧を引き起こす物質「エンドセリン」を発見したほか、99年には人間の睡眠を調節する物質「オレキシン」を発見。以来、睡眠に関する基礎研究を続けてきた。

2012年には筑波大が新設した「国際統合睡眠医科学研究機構」の機構長に就任した。同機構は睡眠のメカニズムの解明と、睡眠障害などの病気の治療薬の開発を目指して組織された。文部科学省の「世界トップレベル研究拠点プログラム」に採択された事業で、過去4年間で約17億円の補助金が拠出された。世界中から睡眠に関する代表的な研究者を集め、約100人体制で研究を進めている。

同機構の研究により、従来の製品よりも副作用が少ない不眠症の治療薬の開発が実現するなど、多くの研究成果を残しており、目標となる睡眠メカニズムの解明に向け、期待が高まっている。

今回の受章を受け、柳沢教授は「日本生まれだが現在はアメリカ国籍であり、このような褒章は縁がないと思っていた。今回の受章に驚いている。一緒に研究を進めてきた研究者たちにも感謝したい」と話した。

紫綬褒章を含めた「春の褒章」の受章者は17日に、授章式に当たる伝達式に出席した後、皇居での記念式典に参加する。

筑波大で論文盗用

人社系 元准教授 引用明記せず

筑波大学は4月15日、小松優香元准教授（人社系）が筑波大在職中の2014年に書いた2本の論文に盗用があったことを明らかにした。昨年11月から今年2月にかけ、日本政治学会や筑波大に対して匿名を含む4件の告発があり、筑波大では調査委員会を組織して調査を行ってきた。小松元准教授は今年3月末で任期を満了し、退職している。

筑波大によると、小松元准教授が発表した本目の論文は、英語文献を和訳した書籍とほぼ同じ文章を記載しつつも引用を明記せず、段落を下げるなどの本文と引用文の区別も行っていなかった。また2本目の論文は29㌻ある本文の大部分で、別の書籍の文章をほぼそのまま使用していたほか、脚注や引用文献も、同書籍とほぼ同じ表記をしていた。

小松元准教授は盗用の意図を否定しているが、筑波大は「客観的に盗用の事実は明らかだ」として、今回の原因を小松元准教授の研究者倫理の欠如とした。

筑波大は今後、全教員らを対象にパソコン上で研究者倫理などに関する知識を学べるプログラムや、研究倫理に関する研修会の受講を徹底するなどして再発防止に努める考え。

筑波大の三明康郎副学長（研究担当）は今回の論文盗用について「厳粛に受け止め、再発防止策に取り組む」と話した。

（田中開＝教育学類3年）

筑波山気象観測所 共同観測を開始

筑波大学計算科学研究センターと筑波山神社（つくば市筑波）は3月24日、筑波山の男体山山頂にある気象観測所で共同観測を始めた。

同山頂での気象観測は、1893年に中央気象台（現・気象庁）が観測を始めて以来、100年以上続けられてきた。2001年に気象庁が撤退し、観測は一時中断したが、06年に筑波大が研究を目的に観測を引き継ぎ、12年からは計算科学研究センターが「筑波山プロジェクト」として観測に力を入れてきた。

筑波山頂に設置されている観測所（2012年3月15日、つくば市筑波で）

海抜871㍍にある山頂は、周りに高い建物や山がないため誤差の少ない観測が可能。気温や気圧、降水量などの観測データは、地球温暖化の研究や降雪予測などに役立っているほか、同センターのホームページで公開されている。筑波山での研究は初期から関わる植田宏昭教授（生環系）は「都市気候の影響を受けずに100年以上気象観測をしているのは、世界的に見ても貴重だ」と語る。

観測所は現在、筑波山神社が所有しており、登山者からの山頂の天候などに関する問い合わせに個別に回答していたが、今後は自宅から筑波山の映像を見られるようにデータを開示し、登山の安全性を確認できるようにする予定。

（徳永翼＝写真も）

「樹木用ＭＲＩ」開発

樹液の流れ 映像に

寺田康彦准教授

寺田康彦准教授（数物系）、長田晃佳さん（電物2年）らの研究グループは、人体の診断に使う核磁気共鳴画像法（ＭＲＩ）装置を改良し、世界で初めて屋外の木の中を動く樹液の流れを映像で再現することに成功した。木の栄養を運ぶ樹液の流れがわかりやすくなることで、樹木の「健康診断」に応用できることが期待されている。研究成果は著名な学術雑誌「Journal of Magnetic Resonance」の4月号に掲載された。

（佐々木悠里＝人文学類2年）

樹液は、根が吸収した水分が葉に達したり、光合成で葉が作った糖分（栄養分）が根まで届くなどして流れている。だがこれまでその動きは具体的な映像ではとらえられなかった。

このため、寺田准教授らはつくば市のベンチャー企業「エム・アール・テクノロジー」などと協力し、人体で使われるＭＲＩを樹木用に改造。これを使って筑波大内のケヤキで、幹断面での樹液の流れを2時間ごとに測定した。

この結果、「樹木用ＭＲＩ」は、樹液の流れを明確に映像で再現。昼に樹液の流れが多く、夜は流れが少ないといった状況や、樹木の水を放出する葉が減少した落葉の時期には樹液の流れがほとんどないことをくっきりと映し出していた。また映像を基に計算したところ、測定対象のケヤキは最も活発な昼には1時間当たり3500ccという大量の樹液が流れていることもわかった。

一般的に、木は樹液の流れが悪かったり、樹液の中に気泡が入ることなどによって、果実のなり具合に影響が出たり、枯れたりする。だがこれまでの樹液の流れを測定するには、幹に穴を開けるなど、樹木の健康を阻害してしまう方法しかなかった。

今回開発された「樹木用ＭＲＩ」は樹木を傷つけない簡易な「健康診断」につながる可能性が高い。寺田准教授らは今後、「樹木用ＭＲＩ」を使って木の中の具体的な糖分の流れも解明するなど、実用化を目指す。

樹木用ＭＲＩでケヤキの木を挟み、樹液の流れを測定する寺田准教授ら＝同准教授提供

卒業生 ピアノ贈呈

学生のインターンが契機

老朽化により練習用のピアノが不足していたピアノ愛好会に、筑波大学の卒業生からグランドピアノが寄贈された。その贈呈式が4月27日に課外活動練習施設で開催された。

ピアノを寄贈したのは1986年に生物学類を卒業し、現在、国内最大級のピアノコンクールの運営で知られる「全日本ピアノ指導者協会」の事務理事を務める福田成康さん。河合楽器製作所の最高級グランドピアノ「Shigeru Kawai SK-5」を寄贈した。贈呈式には同愛好会の会員約30人のほか、福田理事、筑波大の生井栄学生部部長などが参加した。

贈呈のきっかけは同愛好会の前会長が全日本ピアノ指導者協会のインターンに行った際、交流を持った福田さんが同愛好会に興味を持ち、練習場を訪れたこと。1台のピアノで多くの会員が練習している状況を目にし、寄贈を決めた。

ピアノ愛好会の会長の藤生千尋さん（人文3年）は「普段のピアノより、強く弾いた時の音が会場全体に響く感じがした。今後はこのピアノを多くの会員に弾いてほしい」と語った。

寄贈をした福田さんは「今回の寄贈で練習環境が改善し、ピアノ愛好会の実力が向上してくれるとうれしい。母校への寄贈やサポートを通して筑波大を盛りげていきたい」と話した。

（小宮山瑛生＝写真も）

贈呈式に臨む福田さん（左）と藤生さん。後ろのピアノが贈呈された（4月27日、課外活動練習施設で）

ＩＣＵと連結協定

双方の強み生かす

筑波大学と国際基督教大学（ＩＣＵ・東京都三鷹市）は4月6日、両大学が共同して教育を進める大学連携協定の締結式を行った。総合大学として幅広い専門分野が充実する筑波大、英語授業など教養教育が充実するＩＣＵの双方が、互いの強みを生かし学生を育成する。今後、学生がお互いの大学で学ぶことなどが予定されている。

筑波大東京キャンパスで行われた締結式には筑波大・永田恭介、ＩＣＵ・日比谷潤子の両学長など、双方の大学の関係者が出席した。

席上、永田学長は、大学・学生が多様化する今、過去の組織の在り方にとらわれるべきではないと指摘。国立大と私立大の壁を取り払い、有能な学生を育てていく協定の意義を強調した。一方、日比谷学長は、ＩＣＵだけではカバーしきれない医学医療・スポーツ科学、芸術などの分野で、ＩＣＵの学生が筑波大で教育を受けるメリットを指摘した。

両大学は年内にも双方の学生の一部受け入れを目指すほか、将来的には教員が互いの大学で教えることも視野に入れる。双方の海外協定校で両大学の学生が学べる体制も確立する。

（福原直樹）

訂正とおわび

327号1面の朝日前投票所の記事で、「吾妻中学校（つくば市吾妻）」とあるのは「吾妻中学校（つくば市天久保）」の誤りでした。また2面の入試・教育改革の記事で、「平成23年度をメドに」とあるのは「平成32年度をメドに」の誤りでした。おわびして訂正いたします。

おわび

327号5面から9面での入学者名簿で、筑波大学に合格しながら入学しなかった一部の方の名前を、誤って入学者として掲載しました。おわびいたします。

催事

宿舎祭

第42回やどかり祭（宿舎祭）が5月27日（金）―28日（土）に平砂共用棟や平砂テニスコートなどで開催される。27日に前夜祭、28日に本祭が行われる。「入学から間もない新入生に、祭を通して仲良くなってもらおう」をコンセプトに、学生が独自に作り上げる毎年恒例のイベント。

当日は各団体による縁日のほか、ゆかたコンテストや各団体が制作した御輿のパフォーマンスなどさまざまな企画を予定している。

詳細＝http://www.stb.tsukuba.ac.jp/yadokari/（宿舎祭ホームページ）

GPA なぜ引き上げ？

筑波大学は今年度、A＋、A、B、Cなどの成績に関するGPA＝[9]の点数をこれまでより高いものに変えた。平成25年度にGPA制度を導入して4年。制度については学類ごとに評価基準が異なり、「全学的な基準にならない」などの指摘もある。今回の変更理由やGPAの在り方などについて、学内外で取材した。（佐々木悠里＝人文学類、徳永翼、橋野朝奈＝日本語・日本文化学類、石川泰行、岡田優太＝社会学類、深作歩美＝生物資源学類）

学生の留学活発化がねらい

■GPAと筑波大

筑波大学はGPA制度を平成25年度に導入し、今年度から評価点を変更した。A＋の評価点をそれまでの4から4・3にしたほか、Aを3から4に、Bを2から3に、CをIから2にそれぞれ一ずつ引き上げた。A＋の評価点を5でなく4・3にした理由を教育推進課に聞くと、海外の大学の例を参考にするなどしたという。

同課によると、変更の目的の一つは学生が留学をしやすくすることにある。

留学の際にはGPAが選考基準となることが多く、その基準はGPA3以上であることが多い。平成25年度と26年度の筑波大生のGPAの平均は2・38だったが、変更後は3・20になり、同課は「今回の変更が留学の更なる活発化につながってほしい」と話す。

同課によると、GPA導入の目的は、学生の学習意欲を高めることや公平な成績評価だった。導入で成績が数値化され、成績評価の分布が把握しやすくなったり、教員が授業の難易度を考え直す契機にもなる。

また、履修を放棄するとGPAが低くなるため、学生は真剣に履修を組むようになり、履修放棄も少なくなった。同課は「GPA制度導入の目的は達成できた」としており、奨学金の付与や退学勧告などの基準にGPAを用いる大学もあるが、「今のところその予定はない」（同課）という。

その理由は、GPAは全学の統一的な成績評価基準ではなく、あくまで一学類内での成績」という位置付けだからだという。学類で各評価の人数の割合が異なっており、例えばA＋とAの学生の割合を教育学類の授業では50％未満としているが、社会学類ではおおむね30％以下としている。そのため、GPAを学類間で比較するのは難しい。

更に、他学類開講の授業の成績をGPAに反映させるかどうかも学類で異なる。例えば、GPA気にせず他学類の授業に参加できるように、他学類の授業の成績をGPAには反映させない学類もある。この反面、他学類の授業成績をGPAに反映させる学類もあるが、同課は「学類によって扱う学問の特性はさまざまで、一律の基準を決めることは難しい」と話す。

[9] GPA＝Grade Point Average の略。各履修科目の成績を例えばA＋＝4・3点、A＝4点などの点数（Grade Point）で評価し、全科目の平均点を出したもの。GPAを見ればその学生の学習到達度や成績が一目でわかるとされる。米国などで使われており、日本の大学でも導入が進んでいるが、運用方法は大学によって異なる。

◆評価点の変化◆

変更前

A+	A	B	C	D
4	3	2	1	0

筑波大生の平均 GPA：2.38（※）

変更後

A+	A	B	C	D
4.3	4	3	2	0

筑波大生の平均 GPA：3.20（※）

※平成25、26年度のデータを平均した

教員の意識に変化

■生物学類の試み

生物学類では2006年から同学類開講の全授業について、各教員がどのような評価を出したかを全教員に公表している。Aばかりを出したりするなど、極端な成績をつける教員をチェックし、厳格なGPAを出すことが目的だ。

具体的には、「A＋とAの成績評価が偏った授業もあったが、この取り組みを始めてからは、教員の中できちんと成績をつけようという意識が高まった」と話している。

筑波大向けに改良必要

吉田武男教授

筑波大学でのGPA制度の今後について、教育学が専門の吉田武男教授（人間系）に聞いた。（聞き手・岡田優太）

海外の多くの大学で使われるこの制度を導入することは、グローバル化推進の中では大切だが、日本向けに改良することが必要不可欠ではないか。

教育は科学の実験のように、いつでもどこでも同じ結果は再現できない。教育の成果は個人の能力や教育機関のレベルにより差が出るもので、GPAのような日本の大学にない欧米、特にアメリカの制度を導入する際には、日本に適した制度に改良するための創意工夫が重要だ。

そもそもこの制度の導入が進むアメリカと日本では入試制度が大きく違う。日本、とりわけ筑波大のようないわゆる難関校の大学では、入学希望者に厳しい選抜試験を行い、学生間の学力差が少ない状態で学業生活が始まる。

一方で、アメリカでは、面接や小論文を重視した選抜が行われ、学生の学力を保証する制度がない。そのため学生の学力を客観的に測る必要があり、GPAという制度はなくてはならない。

筑波大での今後のGPA制度を考える際に重要なことは、GPA制度が「目的」ではなく、成績を測るための「方法」に過ぎないということだ。

GPA数値を上げることが勉強の目的になると、学生は自分の得意分野の授業の専門外の分野を学ばなくなる。その場合、他学類の授業も受講できるという筑波大開学以来の独自の制度が生かされなくなり、特に幅広い知識を必要とする人文社会科学系の学生にとっての利点が損なわれる。

また、GPA制度が一つの「方法」でしかない以上、成績を数値化させ、他人と比べることが、すべての学生にとって良いわけでもない。学生の中には自分や他人の成績を気にせず、学びたい学問の内容に集中したい人もいる。

アメリカ留学などでこの制度を必要とする学生がうまく活用でき、そうでない学生には雑音や不利益にならないように工夫するなど、筑波大の特徴に合致したアレンジが必要なのではないか。

学生の賛否分かれる

学生の声

今回のGPAの変更について筑波大学生はどう感じているのか。中央図書館前などで聞いた。

【人文2年・女性】

数値が上がるのはうれしい。ただ、A＋の価値が下がってしまうと、「頑張った」という実感がなくなってしまうので少し不満だ。

【自日2年・男性】

他学類の授業も多く取っているが、出席すればAが取れる授業がある一方、レポートの評価が厳しい授業もあり、学類ごとに評価基準が異なる気がする。GPAの評価点を見直しても、根本的な評価の基準が異なっていると意味が無いのではないか。

【自日3年・女性】

突然GPAが変更されたので困惑している。基準の変更を知らない人も多いのではないか。日本学生支援機構の奨学金の手続きなどは旧GPAを用いるため、計算し直すのが面倒で嫌だ。

【社工4年・男性】

GPAが上がったので、大学院に合格しやすくなったと思う。他大学の大学院に合格を受ける場合は有利になるのでうれしい。

今回の変更は学生にどのような影響を及ぼすだろうか（4月27日、松美池前で）＝深作歩美撮影

視点

今回の変更 問題点も

今回のGPAの評価点の変更を受け、「数値が上がりうれしい」「大学院に入りやすくなった」という学生の声があった。また、留学がしやすくなることでグローバル化推進に一役買うのも間違いない。

その一方で、変更には問題もあると感じる。

第一に、GPA導入当初の目的の一つだった学習意欲の向上につながりにくくなったと思う。

取材で、学生から「今回の変更でA＋の価値が下がったと感じる」という声を聞いた。これまで、CからAまでの成績の評価点の間隔は1ずつだったが、変更後はAとA＋の間隔が0・3と小さくなったためだ。変更の結果「GPAを上げたいから勉強しよう」という意欲が生まれにくくなったのではないか。

第二に、学生の留学を活発化しようと、実際に学生の成績が向上したわけではないのに「見かけのGPAだけを上げようとする姿勢に違和感を覚える。確かに、留学する学生を増やしグローバル化を推進するのは賛成だが、昨年までの点数なら選考を通過できない学生に留学させることが本当に学生のためになるのか疑問だ。

また今回の取材では、成績を厳格に評価しており、A＋やAを取得しにくい学類があることも分かった。現状のままでは、留学や奨学金への応募などでGPAを使う際、成績評価が厳しい学類の学生が不利になる恐れがある。成績の評価基準の統一も今後の課題といえそう。

その改善策として、GPAに関する全学的なガイドラインを見直し、学類間で統一された評価点の基準を策定すべきではないか。（深作歩美）

他大学の例

退学勧告の基準にも

GPAは他大学でも導入されているが、その取り扱いは大学により異なる。他大学の各担当者に取材した。

■青森公立大学

GPAを「大学が責任をもって社会に学生を送り出すことのできる学力基準」と位置付け、成績A～D、Fをそれぞれ4～0で評価。GPAが2学期連続で2・0を切った学生には通知文書を送り、3学期連続で2・0を下回ると学生、ゼミの担当教員、保護者の3者面談を行い、家庭の支援などを求める。

4学期連続でGPAが2・0以下の場合は退学勧告を出す。退学勧告に従い自主退学した場合、「4年間科目等履修生」として再度、大学で学ぶ事ができる。

■一橋大学

これまでGPAを卒業要件に用いていたが、平成29年度からそれをやめる。理由は7単位の実質化を進め、質が保証された単位による卒業認定を行う▽4学期制の導入に伴い、学生が年度からそれをやめる。理由は7単位の実質化を進め、質が保証された単位による卒業認定を行う▽4学期制の導入に伴い、学生が4年間のGPAが2・0を上回れば、再入学が可能だ。

■国際基督教大学（ICU）

1953年の大学開学当初から日本で最初にGPA制度を設けた。A～Eの成績を4～0で評価。GPAを奨学金や交換留学の選出基準にも使用してもいる。

履修上限を超えた単位登録や教育実習参加条件、学士と修士双方の学位を5年で取得できる制度などでも一定のGPAが必要とされるなど、数多くの場でGPAが基準となる。また、1学期で12単位以上の科目を登録し、全単位を習得した場合のGPAが3・7以上の場合、学部長から表彰される。

に履修を撤回する期間が取れなくなった……などだ。

だが、海外の大学や社会に学生の修学の成果を示す指標として、GPA制度自体は廃止しない。学内でも、成績優秀者表彰や海外派遣留学の応募要件などとして使っていく予定だ。

記者の声

石川泰行

物資受け入れ中止
優しさ押し付け 問題
過去の教訓を生かせ

一連の地震で被災した熊本市などが4月下旬、救援物資の受け入れを一時中止した。物資が集まりすぎて在庫管理ができないことなどが理由という。それを聞いて思い出したのは昨年、茨城県常総市の水害でボランティア活動を行った時の経験だ。現地に不要な物資が数多く送られ、住民が困惑していたのだ。無論、人々の善意は否定しない。だが今、救援物資の供給の在り方を見直す時期に来ているのではないか。

昨年9月17日、私は常総市の水害現場にいた。鬼怒川の堤防決壊からちょうど1週間後のことだ。茨城県内の市議の下でインターンシップを行っていた関係で、その市議とともに現地に入ったのだ。

被災状況はひどかった。住宅の壁に残る、自分の胸付近の高さまでの濁流の痕跡。道路に山積みされたがれき入りのゴミ袋。そして、猛暑の中で清掃を続ける人々……。そんな中、市の中央にある市役所の2階に赴くと、救援物資が山積みされており、被災者に配られていた。全国の人々の善意を感じ、胸が熱くなった。

だが、後日私が市議から聞いた話は衝撃的だった。「常総市には多くの救援物資が送られたが、中には例えば古着のように被災者が使えないものが数多くあった」というのだ。

また、知人の常総市の住民も後日、「古着なんて使えないし、そんなものを送られてきても困る」と口を揃えた。こうした不要な物資のほとんどは、個人から送られてきたものだったという。

災害発生時の被災地は、状況の把握や被災者の救援、そしてインフラの復旧作業などで手一杯だ。そこに不要な救援物資が送られてくると、その仕分けに手間がかかり、自治体職員ら関係者は疲弊してしまい、復興の妨げになる。

現地からの報道によると、熊本地震では救援物資の数が多く、熊本市や熊本県益城町などが物資受け入れを一時中止した。ある自治体は、一日100台も救援物資のトラックが来て、保管場所にも困る状況だという。また、地元では善意はありがたいが、食料などは賞味期限がくるので「もったいない」との声も聞かれるという。

実際、常総市での水害の際にも食料として送られてきた物資の中には、被災者に配布される前に賞味期限が切れてしまい、一般の可燃ごみと一緒に処分された事例がある。

善意の救援物資が、被災地にとって「優しさの押し付け」になってしまっては元も子もない。東日本大震災の時も「ある物資が不足している」という情報が流れると、全国から必要以上に大量に送られてきて混乱を招いたという。今後、政府などが中心となり、いざというときの救援物資の供給の在り方について真剣に考えていくことは、喫緊の課題ではないだろうか。

今の日本は天災がいつやってきてもおかしくない状況が続いている。過去の災害から得られる教訓は、一つ残さず今後に生かしていかなければならない。

（社会学類2年）

筑波時評

プロ選手賭博問題
揺らぐスポーツ倫理
教育体制の確立必要

深澤浩洋（ふかさわひろよう）准教授（スポーツ哲学）

体育系・准教授。1998年筑波大学体育科学研究科修了、博士（体育科学）。電気通信大学電気通信学部准教授などを経て2011年より現職。

プロ野球界で起こった野球賭博問題とバドミントン選手による違法カジノ問題。いずれも賭け事への関与が反社会勢力の資金源となる可能性をはらんだ由々しき問題だ。

だが、あえて両者の違いを考えると、前者は、その行為がプロ野球の試合における八百長に発展する可能性があり、スポーツにおける倫理に直接関わる問題といえる。一方後者は、違法性のある賭博を行ったという意味で、一般社会における法（倫理）に触れる問題である。つまり、前者は野球というゲームの成立やその面白さを危うくしてしまうような、スポーツにとっては致命的な問題に直結するのに対し、後者は、バドミントンのゲーム内容を左右するわけではない。

これはあくまでスポーツが競技として成立するかどうか、というスポーツ側の視点から指摘できる違いにすぎず（実際、今回の野球賭博は立件されたが）、バドミントンのルールに違反したわけではないからと選手救済を訴えるのは筋違いだ。

ただ、スポーツの直接的関与者（選手、コーチ、役員）と間接的関与者（観客、メディア、スポンサー）との間にあるウロボロスのような共依存関係を思えば、スポーツ選手にのみ責任が負わされている状況を看過するわけにもいかない。

これらの関係主体は、今後選手たちを教育する手立てを確立するよう努めるべきだろう。それなしに「選手に再びチャンスを」などと軽々に述べるべきではないと思う。例えば選手に対し、スポーツを行える環境がいかにして用意されているかに気付き、競技中の善きこと（従来はフェアプレーが中心的な問題であった）と競技の外での善きことを区別し行動するよう促す必要があるだろう。

こうした分別がつかないような未成熟な競技者を生み出し続けるわけにはいかない。自らの置かれた環境の外部に立ち、相対化する目を持つことは倫理の要であり、今後の変革の可能性はそこに見出されるだろう。その善きこと、競技の外での善きことを区別し行動するよう促す必要があるだろう。

こうした分別がつかないような未成熟な競技者を生み出し続けるわけにはいかない。自らの置かれた環境の外部に立ち、相対化する目を持つことは倫理の要であり、今後の変革の可能性はそこに見出されるだろう。その手立てを確立するよう努めるべきだろう。それながら、それを支える人材は極めて乏しく、スポーツ哲学・倫理学といった授業や研究者を抱える大学もそう多くはないのが現状だ。

問題が起きるまで発生していないものや、見えていないものを存在しないかのごとく考えてしまう傾向は、スポーツ界に限らず広く浸透しているように思える。例えばだが、賞金や強化費の一部を大学などのそうした人材養成などに提供していただけたら、スポーツが名実共に成熟した文化となっていくのではなかろうか。そして勝ちの価値を皆が正当に評価できるようになること。それが筆者の掲く「IMAGINE THE FUTURE」だ。

反射鏡

私の地震対策

東日本大震災から5年目の今年4月、熊本を中心とした九州地方を、最大震度7の大地震が襲った。地震には日ごろからの備えが大事だが、実際に筑波大学生はどのような対策をしているのか。石の広場で聞いた。（岡田優太＝社会学類2年、秋田耕平＝同1年）

【医学1年・男性】
学生宿舎に住んでいる。部屋に大きな荷物を置かないようにしたり、収納用品をベッドの下に置いたりするなど、地震が起きた時にけがをしないよう工夫している。

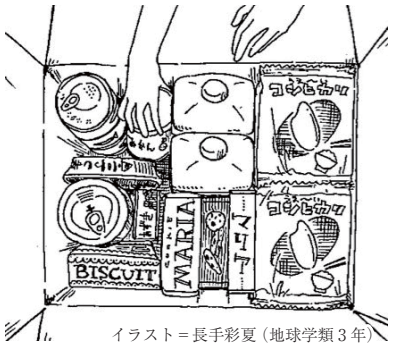
【看護1年・女性】
つぶれ市と筑波大が発行している防災ハザードマップを持っている。いつ地震が起きてもいいようにマップを見て避難経路を確認している。

【応理1年・男性】
カラーボックスの下に耐震マットを敷いている。実家では家具の固定などもしていたので、今後自分の部屋でも家具の固定をしたい。

【化学3年・男性】
物が落ちてけがをしないように、大きな物は低い場所に置いている。テーブルの上もできるだけ端に物を置かないようにするなど、日ごろから地震対策を行っている。

【人文3年・女性】
つっぱり棒で家具と天井を固定している。地震でタンスが動くとベッドの上に倒れてしまうので危険だと感じたから。

【看護1年・女性】
2㍑のペットボトルを3本ほど常備している。地震や水害で断水になる時や、避難する時に備え、飲み水は必要だと思う。



イラスト＝長手彩夏（地球学類3年）

【比文1年・男性】
地震が起きたらベッドから下まで真っすぐ行けるように、部屋を整理して、地震が起きた時にすぐ外に出られるようにしている。

【看護1年・女性】
食料を備蓄している。水や米、缶詰、ビスケットなどを段ボールに入れて大量に置いてある。

【人文3年・女性】
パソコンと家具の柱をひもで結んで落ちないようにしている。ほかの物も固定をしているが、中でも落ちたら壊れるものを中心に固定するようにしている。

【日目2年・男性】
夜中に地震が起きてもけがをしないように、棚の近くのように荷物が落ちてきそうなところからは離れて寝ている。また、車のガソリンは常に満タンにしておくように心がけている。

早起きの工夫

4月から新学期が始まり1カ月が経過した。新入生も1級も新生活に慣れてきたころではないだろうか。そんなこの時期に気を付けなくてはいけないのは、気のゆるみだ。特に「早起きが難しい」という悩みは多くの人が抱えているだろう。筑波大学生の早起きの工夫は何か。中央図書館周辺と石の広場で聞いた。（小宮山瑛生＝社会学類2年、田中美帆＝国際総合学類1年）

【人文4年・男性】
アラームを掛けて寝るが、絶対に遅れてはいけないときは寝ないこともある。寝なければ寝ることもない。

【比文1年・男性】
3桁の掛け算などを解かないと解除されないアラームを使用している。計算している間に目が覚めてくる。

【社学1年・男性】
30分間、5分ごとに違う音のなるアラームを使用している。音ごとに歯磨きや洗顔などの行動を決めており、それに従っている。

【社学2年・男性】
目覚ましを一つだけでなく複数セットする。

【比文1年・女性】
初めての授業で寝坊したことがあり、それ以来寝坊が怖くてアラームで起きるようになった。

【日目3年・女性】
携帯のアラームを掛けるが、音量が小さく起きられないことがある。音量の大きなテレビの目覚まし機能を使い早起きしている。

【エンス1年・男性】
普通の目覚まし時計と携帯のアラームを同時にセットして起きられるようにしている。

【国総1年・男性】
ベッドの近くにストーブを置いておく。寒い時期はこのおかげで部屋が暖まり二度寝の防止になる。

【化学3年・男性】
1分ごとにアラームを設定し、10分連続で流して起きている。

【芸専1年・女性】
昔行っていた方法だが、夜寝るときに枕元に水やハッカ油を置いておき、朝起きた時に顔や目の下につける。するとシャキッと起きることができる。

【日目1年・女性】
日付が変わる前に寝る。この方法では自然と早く起きることができる。私自身いつも午前6時には起きている。

【エンス1年・男性】
早めに寝ることと、アラームをかけることを行っている。

【物理1年・男性】
高校の時から起きる時間を変えていないので生活リズムができており、自然に目が覚める。また、湯船にしっかりつかり、疲れをとっている。

【社学2年・男性】
携帯のアラームの回数を多めにセットしておく。起きた時に水を1杯飲むことで寝ぼけるのを防ぐ。

【国総4年・女性】
朝早く起きるために必要なのは気合いだと思う。

【教育3年・男性】
普段は7時間ほど寝るようにしているが、遅く寝る時は一杯コーヒーを飲むようにしている。カフェインの影響で睡眠の質が低下すると言われているが、朝の目覚めは良くなる。

【日目2年・男性】
自分に合った枕を見つけ、睡眠の質を向上させることで短い睡眠時間でも目覚めが良くなった。

【社学2年・男性】
日中の空いた時間で30分ほど昼寝をして疲れを取ると、朝の目覚めが良い。

【比文1年・男性】
二度寝することが減った。

筑波学生文芸賞作品募集

つくばの大学生対象「気軽に応募して」

これまでの「筑波学生文芸賞」の冊子（5月9日、筑波大学附属中央図書館で）＝徳永翼撮影

つくば市に住む大学生から文学作品を募り、優秀な作品を決める「第9回筑波学生文芸賞」の募集が、5月1日から7月15日まで行われている。大賞作品にはスターバックスカード5000円分が贈呈される。今年度からは選考委員に大学生以外のつくば市民も参加。昨年度の受賞作が好評だったこともあり、今年度の受賞作が注目されている。

同賞は筑波大学生の有志が、つくばでの文学活動を活発にしようと2008年に設立したもの。現在、筑波大生など4人の大学生が運営委員として企画と運営を行っている。

一般部門とベリーショート部門があり、一般部門は原稿用紙21～80枚以内の中編作品、ベリーショート部門は20枚以内の短編作品が対象。内容に規定はなく、純文学やSF、ファンタジーなど幅広いジャンルを投稿できる。

一次選考で2部門合わせて約10作品を選んだ後、公募で集めた一般の選考委員とともに最終選考を行う。昨年までは一般の選考委員をつくば市の大学生に限っていたが、今年度からはすべてのつくば市民を対象に公募を行う。一般選考委員は人数に規定を設けず、6月上旬に行われる模擬選考を体験した上で、最終選考に参加できる。

一般部門は「考察の深さ」などの4項目、ベリーショート部門は「主題とテーマの良さ」などの2項目を基準に評価し、大賞、佳作、ベリーショート賞を決定する。各賞の受賞作品には数千円分の商品券が送られるほか、運営委員会が毎年発行する冊子「筑波学生文芸賞」などに掲載される。

運営委員会の代表を務める千葉高志さん（人文3年）は「文芸賞だから難しく考えずに、どんなんでも気軽に応募してほしい」と話した。

「筑波学生文芸賞」の冊子は学園祭で例年配布されるほか、筑波大学附属の各図書館やつくば市立中央図書館（つくば市吾妻）でも見られる。

（中垣亮彩＝心理学類2年）

開学記念館で茶会開催

季節感ある演出も

物静かな空間で来客者に茶を振る舞う会員。掛け軸や花について解説していた（4月30日、開学記念館で）

茶道同好会の「若葉茶会」が、4月30日に開学記念館で開催された。同会の会員が来客者をお茶と和菓子でもてなす毎年恒例のイベントで、新緑に囲まれた開学記念館に約50人の筑波大生や一般客が訪れ、茶の世界を堪能した。

茶会では練り切りなどの生菓子が出される和室と、和三盆などの干菓子が出される部屋が設けられ、来客者は部屋ごとに違う茶の作法を体験した。会員が案内人となり、茶の作法や茶わん、掛け軸、生け花について丁寧に解説するなど、初めて茶会に足を運んだ来客者も楽しめる工夫がされた。

また端午の節句が近いことから、こいのぼりを連想させるコイ模様の茶わんを使用したり、「若葉」の形の生菓子が出されるなど、季節感のある演出で来客者を楽しませた。

参加者の阿部寿季さん（社学2年）は、「茶道の作法などは全く知らなかったが丁寧に説明してくれたのでとても楽しめた。気軽に行けてとても良かった」と話していた。

会長の宗像真帆さん（国総3年）は「和やかな茶会を開けて良かった。若葉茶会の名前に合うように、使用する道具やお菓子を会員全員で考えた。秋にもお茶会があるので、今回の経験を生かし、季節に合わせた演出で楽しんでもらえるようにしたい」と語った。（加藤未悠＝社会学類2年、写真も）

ダンスで会場沸かす

Real jam

ストリートダンスサークル「Real jam」の新歓ダンスイベント「Mei, Night（メルナイト）vol. 36」が4月23日に1E棟で行われ、計14組がさまざまなジャンルのダンスを披露した。全チームが終了した後には、2組のプロダンサーをゲストに招いたも企画もあった。来場数は140人を超え、会場は熱気に包まれた。

イベントは3生を中心とする20人で踊る大人数のダンスで始まった。曲調が変わったところで全員が1つの円になり、音に合わせて一斉に手を広げる迫力ある演出で観客を魅了した。

男女混合のチームで踊ることが多い「ヒップホップ」を女子5人のみで踊り、注目を集めたのは9組目の「momoble m」。所々でメンバー同士が目を合わせる振りを入れることで、楽しげな曲調を表現した。メンバーの永崎佑里さん（メ創3年）は「女子ならではの良さを生かし踊ることができた」と話した。

熱気が最高潮に達する中、学生の出番の最後を飾ったのはジャンル「ロック」のユニット「janish」。「ロック」は「鍵」を意味し、激しいダンスを所々で鍵を閉めるように鋭く止める、キレのある動きが特徴のジャンルだ。2人の少人数ユニットながら、迫力のあるダンスと切れのある「止め」の組み合わせで会場を大いに沸かせた。

部長の高島涼太さん（社工3年）は「どうすれば新入生が楽しんでくれるかを第一に考えてイベントを行った。たくさんの新入生が来てくれてうれしい」と語った。（橋野朝奈）

新入生に歌声届ける

混声合唱団

美しい歌声を披露する団員たち（4月22日、第三エリア食堂で）

筑波大学混声合唱団の新入生歓迎コンサートが4月22日、第三エリア食堂で行われ、筑波大の学生歌「常陸野の」など計6曲を披露。会場を訪れた新入生に美しい歌声を届けた。

2曲目に歌われた「ぜんぶ」はテレビアニメ「ちびまる子ちゃん」の原作者であるさくらももこが作詞したもの。この曲の特徴である穏やかな曲調を、ピアノ伴奏が入らないアカペラで表現した。

4曲目には北海道の厳しい環境で生活する海鳥を表現した「エトピリカ」を披露。3曲目までの穏やかな雰囲気から一転し、テンポの速い伴奏と高音部の力強い歌声で、自然の雄大さと海鳥のたくましさを印象づけた。同コンサートを聴きに来た新入生の津田奈菜子さん（看護1年）は「高校時代に『ぜんぶ』を歌ったことがあるが、この公演ではパートごとの音の重なりを美しく感じた」と話した。

同合唱団代表の愛川範侑さん（比文3年）は「多くの新入生が訪れてくれてうれしい。新入生が加入しても、全員で一つの歌を歌い上げる楽しさを大切にしたい」と語った。（岡田優太＝社会学類2年、写真も）

◆おことわり

「絶対音感」は休みました。

私の一冊

『長くつ下のピッピ』

A・リンドグレーン 著（岩波書店）

常識破りの世界観伝える

土井 隆義（とい たかよし） 教授（社会学）

大阪大学大学院博士後期課程中退。博士（人間科学）。大阪大教養部助手、筑波大学社会科学系助教授などを経て2011年10月より現職。

小学3年生の夏休み直前に、父の仕事の関係で静岡県から山口県へ転校した。クラスメイトのみんなとお別れ会をしたとき、一人の女の子がそっと手渡してくれた本が、A・リンドグレーン作の『長くつ下のピッピ』（岩波書店）だった。でも、SF好きの理系少年だった私は、「趣味じゃないや」と思って、しばらくページをめくることもしなかった。

自室の本棚の隅に埋まっていた本書を再発見したのは、たぶん5年生になった頃だったと思う。部屋の整理をしていて、表紙に描かれた派手な服装のピッピにふと目が留まり、改めて読んでみる気になったのを覚えている。当時の私は、夜中に何度も起きて翌日の学校の持ち物を点検するほど神経質な少年で、極度の不安状態から不眠症にも陥っていた。

縦のものを横にするなど考えもつかなかった私にとって、枕に足を乗せ、布団を頭にかけて眠るピッピの行動は、世界観がひっくり返るほど衝撃的なものだった。医者から処方された精神安定剤も効かなかった不眠症が、すっかり治ってしまったほどである。「なんだ、べつに上下あべこべでもぜんぜん構わないんだ」と、強迫観念から解放されたのである。

ピッピの行動は、人間関係の面でも実に破天荒である。左右でまったく色の異なる長くつ下をはき、それをみんなに指摘されてもまるで動じない。今の言葉を使えば、KY（空気が読めない）の元祖のような人物である。それでも周囲から嫌われることなく、むしろ自分の空気じゃんなを巻き込んで幸せな気分にさせていく。実は人を見抜く天才なのである。

本書を手渡してくれた女の子も、生真面目すぎる私の性格を見抜いていたのかもしれない。その後の人生には色々な出来事があったが、本書との出会いがそれまでの幼稚な価値観に大転換をもたらしてくれたことは間違いない。世の常識を疑うことが、私が専攻している社会学という学問の基本姿勢だとすれば、現在の研究人生の原点ともなったように思う。

彼女の顔はもう思い出せないが、背表紙も経年劣化で完全に色あせてしまったが、この貴重で素敵な贈り物は今も私の本棚の隅にそっと並んでいる。

ぶらり俳句 筑波大

「藤」

撮影地＝松美池前

・人みちに藤かをりゐる夕かな（ゆう）
・藤棚にして下闇の疎なりける（しもやみ）
・藤房のかげ薄れつゝ重なれり

春の終わりに薄紫色の花をたくさんつける藤。棚に仕立てて上から花房を垂らす「藤棚」はこの時期の風物詩で、学内では松美池のほとりなどで見られる。だんだんと房が痩せ、棚の下に花弁が散り敷く頃にはもう夏が来る。（堀下翔＝比較文化学類3年、俳句同人誌「里」「群青」所属、写真も）

◆ ◆

学生俳人・堀下翔が筑波大学を散策し、季節に合った風景や事物を俳句にします。随時掲載します。

注目集める障がい者スポーツ

リハビリから生涯スポーツへ

9月7日からパラリンピックがリオデジャネイロ（ブラジル）で開幕する。近年、障がい者スポーツに注目が集まっており、日本では幅跳びで山本篤（スズキ浜松AC）が世界新＝6㍍56＝を記録。また、筑波大学の瀬立モニカ選手も世界パラカヌー選手権で9位に輝くなど、メダルへの期待も高まる。その一方で、草の根の障がい者スポーツも盛んになり、筑波大では、体育専門学群の学生がカンボジアで障がい者スポーツを広めるなど、独自の取り組みも行う。障がい者とスポーツの関わり方を考えた。（橋野朝奈＝日本語・日本文化学類、大西美雨、前名裕一＝社会学類、中垣音彩＝心理学類）

歴史と発展

■パラリンピックの歴史

パラリンピックは1960年にローマで開催されて以来、今夏のリオ大会で26回目となる。当初はリハビリテーションの手段として開催され、福祉的な役割が強かった。だが、近年では健常者たちのオリンピックと同様に「競技スポーツ」としての側面が注目を集めている。

第1回ローマ大会では23か国400人が8競技に参加したのに対し、2012年のロンドン大会では164か国4310人が参加するなど、大会の認知度は増す一方。それとともに、競技人口も増加し続けている。また、競技数も過去と比べて大幅に増えており、リオ大会では22競技が行われる。

■草の根スポーツへ

1998年の長野大会では日本人選手が活躍し、マスメディアが大々的に報道。これを転機に、国民の障がい者スポーツに対する意識が変化した。96年のアトランタ大会期間中の写真付き記事数は日本の4紙で計13件だったが、2年後の長野大会では国内開催も伴い、2,243件と急増した。

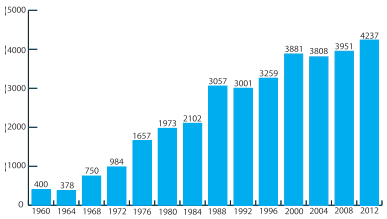
また記事の扱われ方も変化した。アトランタ大会中の写真付き記事のうちスポーツ面に記載されたものは15・4％だったが、長野大会では21・0％と増加。逆に、社会面での記事の割合は53・8％から34・2％と減少した。障がい者スポーツが「競技スポーツ」として認知され始めたことの証だった。

これ以降、障がい者スポーツは、一般的にイメージされていた「リハビリテーションの延長」という狭義のものから、「生涯スポーツ」として、健常者と同様に多様な目的で行われていることが知られるようになった。

文部科学省では、2011年8月に施行された「スポーツ基本法」に基づき、障がいの有無を問わずに、スポーツに参加できる環境整備を進めている。

夏季パラリンピック参加者数（人）

日本パラリンピック委員会ホームページ「パラリンピックとは」から作成



筑波大の活動

■筑波大学の取り組み

筑波大アダプテッド体育・スポーツ学研究室では障がい者に向けたスポーツ普及のための取り組みを行っている。その一つが障がいのある子どもたちのためのスポーツイベント「つくりんピック」だ。筑波大、筑波技術大、茨城県立医療大の3大学連携事業の一環。研究室の学生が企画・運営を担当し、障がいの有無に関わらず楽しめる場の提供や、学生の教育を目的としている。

同研究室はまた、地域の障がいのある子どもを対象にした運動教室を定期的に開き、スポーツに触れる場を作っている。

一方、筑波大では障がいの有無にかかわらず一般の体育授業である「共通体育」を履修する。

ただし、心身のコンディションが理由で通常開設種目の履修が難しい学生は「トリム運動」が選択できる。トリム運動は、「その人が出来る運動」を行うのが目的で、学生は担当の教員との面談上で、自分に合わせた運動を決めていく。またこれらの学生も、学期に何回かは通常の体育科目の授業を受ける。

障がいのある学生はトリム運動を必ず受講しなければならないわけではない。本人のニーズに合わせて種目を選択することが推奨されている。

■サークル活動

スポーツなどを通じ、知的障がいを持つ人と交流を続けるサークルが筑波大学にある。障害科学類の学生を中心としたサークル「スポーティア」で、月1回ほどの活動には筑波大生や知的障がいを持つ高校生から30代までの約30人が参加する。

スポーティアはつくば市の社会福祉協議会と協力し、参加者は主に社会福祉協議会を通じて集められる。活動の拠点はつくば市立大穂体育館（つくば市大穂）。ルールが複雑でなく誰でも楽しめるスポーツを中心に交流が行われ、参加者とドッジボールをしたり、夏には水遊びなども行う。また運動会も開催するなど、多様なプログラムを実施。

代表の藤田愛理さん（障害3年）は「障がいを持つ人と交流したい」と思いスポーティアに入った。藤田さんは「参加者一人ひとりの状況を把握しながら活動するのは大変だが、参加者が笑顔になった時や、楽しそうな様子を見た時にやりがいを感じる」と話している。

つくりんピックでスポーツを楽しむ参加者たち。障がいの程度に関わらず、子どもと学生が綱引きに参加する＝齊藤まゆみ准教授提供

カンボジアで筑波大生が授業

海外で交流

障がい者スポーツを通じ、途上国での障がい者理解を深めようと、筑波大学体育系は国際協力機構（JICA）と協力し、2015年以降、年2回、体育系学生をカンボジアに短期派遣している。

カンボジアは東南アジアに位置する発展途上国。現地では点字ブロックなどバリアフリー設備の設置が遅れ、「障がい者と健常者の共生」という考え方もなかなか浸透していない。そんな中、学生たちは現地の中学校や高校でユニークな授業を行うなどして奮闘した。

シッティングバレーボールを楽しむ現地の子どもたち＝宮下寛太さん提供

今年2月29日から3月23日までの通算3回目の派遣には学群生、大学院生計5人が参加。カンボジアの中高3校で60分授業を3回ずつ行った。授業は事前に派遣学生が内容を考え、現地のメコン大学の学生と協力して進めた。

1回目の授業では障がい者と健常者が一緒に遊べる活動を派遣学生が提案。2人組を作り、1人が目隠しして歩くことで、障がい者の状態を体験する「ブラインドウォーキング」を実施した。また、足が不自由な状態を想定し、腕の力だけでボールをパスし合う遊びも行った。

2回目の授業では、ブラインドサッカーや、お尻を浮かさずに座ったまま行うシッティングバレーボールなどを実施。日本で親しまれる障がい者スポーツを、現地の学生とともに楽しんだ。

また3回目には現地の学生が考案した障がい者スポーツを行った。この中には視覚障がい者も一緒に楽しめるよう、ボールを転がして行う競技、「フロアバレーボール」などが含まれていた。

派遣された宮下寛太さん（体専3年）は、「机上で学ぶのとは違い、実際に自らが体を動かし障がいを学ぶことで、（障がいへの）理解がより深まる」と思う。今後もスポーツを社会に活かせるような活動を続けたい」と話した。

宮下さんらによると、現地の学生は授業について「健常者の自分でも楽しみながら学べる内容だったが、障がいを持つことの大変さも分かった」と話していたという。

筑波大のカンボジアへの学生派遣は19年まで行われる予定。

識者の視点

齊藤まゆみ准教授

障がい者とスポーツ、そして健常者と障がい者スポーツの関係はどうあるべきか。障がいの程度に合わせルールや使用器具を変えるアダプテッド・スポーツなどが専門の齊藤まゆみ准教授（体育系）に話を聞いた。（聞き手・大西美雨）

――障がい者がスポーツを行うメリットは

体を動かしたい、スポーツをしたいと思う感情は自然なもの。障がい者の中には「自分は運動してはいけない」と思い込んでいる人も多いが、そんなことはない。「普通に思い切り体を動かしていい」という意識をもってほしい。

筑波大では授業の「共通体育」の中で障がい学生も体力測定を行っている。その中では足が不自由な学生も車椅子で50㍍走を計測する。また障がい者向けの「トリム運動」の授業では障がいの有無にかかわらず実施できる、アダプテッド・スポーツを行う。「どう体を動かすか」という方法を模索する中で、「自分にもできる」という小さな成功体験を積み重ねることが心身の発達にも重要だ。

――パラリンピックに関心が高まっています

メディアや国際オリンピック委員会（IOC）が、パラリンピックは福祉的な行事ではなく、最高峰の障がい者スポーツ大会だということを全面に打ち出したことで、一般の人々が興味を持ち始めている。また、教育制度の改変で小学生のうちから障がい者と触れ合う機会もでき、小さいころから障がいを認識し、何も特別ではなく、身近なものなのだと考える子どもも増えた。これらも人々がパラリンピックに関心を持つきっかけだろう。

――日本の障がい者スポーツの普及率は

日本にはパラリンピックの競技全種目に出場する選手がそろっている。だが、成人で週1回以上スポーツを行う障がい者の割合は全体の2割未満で高くない。指導員がいなかったり、スポーツクラブに足を運んでも入会を断られるケースもある。

その一方で学齢期に学校で体育の授業があり、「体を動かす」経験をした障がい者は増えている。だが、障がい者も利用できる運動施設は依然として足りない。

――健常者はどのように障がい者スポーツと関わるべきでしょうか

障がいの有無には関係なく、スポーツとの関わり方の基本は「する」「観る」「支える」。まずはスポーツを観て、応援する。興味があったら一緒にやってみる。そのあと障がい者を支えながら、そのスポーツに親しむ。この3つのステップが重要だ。まずはそのスポーツを観て、一緒に楽しむことから始めるべきだ。

「楽しむ」ことから始める

リオパラリンピックまで あと4ヵ月

困難乗り越え世界に挑む

選手の活躍

パラリンピックでの日本人選手のメダル獲得は、早くも1964年の東京大会で達成された。同大会の男子車椅子のダブルスで、猪狩靖典選手と渡部勝男選手が金メダルに輝いたのだ。以降、日本人選手は18競技で432個のメダルを獲得するなど、奮闘。近年でも、2014年のソチ大会で、2人の選手がアルペンスキーで金メダルを獲得するなど日本人選手が活躍しており、今後のメダルへの期待が高まっている。

筑波大学も10年のバンクーバー大会のクロスカントリースキーで、2つの金メダルを獲得した新田佳浩（平成14年度体育専門学群卒）や、北京大会の走り高跳びで5位に入賞した鈴木徹（平成16年度同学群卒）など、多くのパラリンピック選手を輩出してきた。

そして今、筑波大で注目されるのがパラカヌー（障がい者カヌー）の瀬立モニカ選手（体専1年）だ。今夏のリオデジャネイロ大会への出場が期待される瀬立選手を取材した。

◆

瀬立選手は、昨年8月に世界パラカヌー選手権（イタリア）で9位。同年9月に日本パラカヌー選手権大会（石川県小松市）で優勝するなど、パラカヌー界期待の新人だ。

カヌーとの出会いは、健常者だった中学2年生の時だった。

出身地の東京都江東区は13年の東京国体に向けてカヌー選手の強化に力を入れていた。水泳が得意だった瀬立選手は、同じ水を使うカヌーにも向いているのではないか……。そう考えた体育の先生に誘われ、近隣中学合同のカヌー部に入部。3年生の夏には全国中学生カヌー大会にも出場した。高校では水泳部に入ったが、カヌーの練習にも励んだ。

転機は、国体を目前に控えた高校1年生の6月。体育のマット運動で倒立前転をしたところ、頭と背中を強打した。「2週間で退院」と医師は話したが、1カ月経っても起き上がれず「体幹機能障害」と診断された。補助無しでは座ることもできない状況。10月に退院したが、車椅子での生活が始まった。当時を振り返り、「落ち込むというよりも、これからどうしようという気持ちが大きかった」と話す。

だが退院の翌年、江東区カヌー協会からパラカヌー選手にならないかとの打診があった。当時は「車椅子で生活を送るのに精一杯で、パラカヌーをやろうとは思わなかったが、カヌー協会の人の「日本代表になれる」という言葉を聞き、パラカヌーを始めた。

パラカヌーは、障がいのある選手が200㍍の直線コースでタイムを競う。障がいの程度によって3クラスに分かれ、瀬立選手は体幹を使えないKL1（カヤックレベル1）でプレーする。

通常のカヌーは足でラダーを操作し方向を調整するが、パラカヌーでは選手が足を使えないことが多いため、ラダーを真っ直ぐに固定し、全て手の力でカヌーを操作する。

「操作は難しいが、練習がすぐに結果につながるのでうれしい」と厳しい練習に取り組む。

健常者カヌーの先生の教えをうけることもあるが、障がいのために指示通りに動けないことが多い。

「パラカヌーでは、通常のカヌーの理論が正しいとは限らない」と話す。教えをどうアレンジするか、どう自分に適したアドバイスを選ぶかが重要になってくる。それが「パラカヌーの面白く難しいところ」だという。

5月17―19日の世界選手権（ドイツ）はパラリンピック・リオ大会の最終選考。「東京大会のためにも場数を踏んでおきたい」。その目は4年後の東京大会の舞台を見据えている。

練習に励む瀬立モニカ選手＝本人提供

HELLO! 先端科学

木下奈都子助教

植物の防御反応利用

減農薬栽培への応用も

植物は、どちらかというと「静」的または「受動的」なイメージで捉えられることが多い。しかし、植物にも私たち人間と同様に多くの「ストレス」が存在し、さまざまなストレスに対応している。そして、それぞれのストレスに生理反応を引き起こすことで、常に変化し続ける環境に適応している。植物にとって重大なストレスの一つが「害虫に食べられること」である。食害を受けると植物側でさまざまな反応が起こる。その状況を研究し、将来的に減農薬栽培に役立てようとしているのが木下奈都子助教（生環系）だ。

同助教によると植物は害虫に葉や茎を食べられるとストレスを「感じ」て、害虫が嫌う物質を作り出し、害虫に抵抗する。またこれまでの研究で、虫食いの被害を受けていない周囲の植物も、被害を受けた植物が出す気体状の物質を感知して、害虫に抵抗することが知られている。

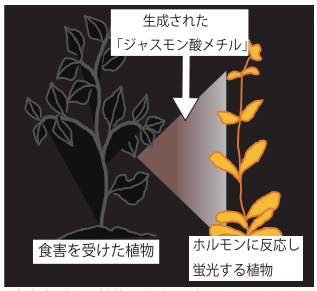
この反応は被害を受けた植物が出す気体状の物質が、何らかの方法で周囲の植物に影響を与え、害虫襲来の情報を伝えるためだとされてきた。だがこうした気体状の物質は目に見えないため、詳しいメカニズムは解明されていなかった。

そこで同助教は、植物が虫に食べられた際に出す「ジャスモン酸」というホルモンに反応して、蛍光を発するアブラナ科の植物に着目。ジャスモン酸のほとんどは液体として存在するが、一部は気体として存在し「ジャスモン酸メチル」と呼ばれる。ジャスモン酸自体は見えないが、このホルモンの働きが活性化されると蛍光を発する植物を用いて蛍光の動きを観察することで、ジャスモン酸メチルの働きを視覚的に捉えることを考えた。これを行えば、ジャスモン酸メチルが、被害を受けた植物から空気中に拡散し、周囲の植物の体内に吸収され反応する状況を解明できる。

例えば温室で野菜を栽培する際、このアブラナ科の植物を温室内に等間隔で植えたとしよう。このアブラナ科植物の蛍光状況を監視し続ければ、温室のどこで野菜が害虫の被害にあい、ジャスモン酸メチルを出したかが判明する。別な言い方をすれば、これで温室内のどこに害虫がいるかも一目瞭然で分かる。

同助教によると、このシステムを開発できれば、害虫の食害が起きている部分を少ない労力で早期発見することができる。

農薬の害が叫ばれてから久しい。同助教の研究が進み、減農薬栽培の野菜が廉価で市場に流通する日も近いかもしれない。（小宮山瑛生＝社会学類2年）



食害を受けた植物が出す「ジャスモン酸メチル」に反応し、蛍光する植物のイメージ

卒業生からの手紙

若者よ、旅に出でよ

一人旅をしたことがありますか？ 今、始終誰かとつながっている世の中、どこにいても、簡単に、友達、親、知り合いと連絡が取れる。携帯電話で、メールで、SNSで。旅先でトラブルがあっても、孤独な気持ちになっても、Facebookに一人でご飯を食べている写真をUPすれば、誰かが「いいね！」を押してくれる。

日本の学生たちがあまり海外に出なくなったらしい。ネットで動画も写真も見られるから、「外国」にそれほど魅力を感じないとか。

私が20歳の時には、携帯電話もネットも無く、海外ガイドブック「地球の歩き方」を頼りに、アメリカ人の友人の電話番号を書き留めた手帳と、文庫本をバックパックに詰めて、自分史上初めての飛行機に乗った。泊めてもらう知り合いたちに手紙で連絡はしていたが、移動は片道一人。45日間、国際電話も高額だった。

食事一つ頼む時にも、自分の英語の未熟さを思い知る。「What would you like in your hamburger?」前に並んだ人が「Everything」と頼んだので、まねをして事なきを得たが、言葉は使えて何ぼのものだと思い知った。

できたら、日本語が通じるリゾートみたいなところではなく、1週間以上旅するのをお勧めする。旅費は決して親の援助を頼ってはいけない。自力で貯める。「一人旅」はそこから始まる。トルの価値が全然違う。

基本的には携帯はオフがいい。どんな遠くへ行っても、始終誰かとつながっていたらそれは「日常」だ。「日常」の外には、さまざまなトラブルもあるが、それを自分の頭で考え、自分の人間力で解決する。そして、知らない人と語り合う。それがどっても大事なこと。

「一人旅」を終える頃に、君は知るだろう。自分がいかに未熟で、ちっぽけな存在で、学ぶべきことがいかに多いかを。それが、社会だ、世の中なのだ。

若者よ、旅に出でよ！ 筑波の外には、ネットの外には、まだ知らない世界が待っている。（昭和58年度自然学類卒業）

フジテレビ番組審議室室長

柴﨑 敦子 さん

筑波自然図鑑

サソリに紫外線を照射すると、青緑色に光るのはご存知だろうか？ 紫外線を吸収している間、そのエネルギーを使って可視光を放出し続ける現象を蛍光という。残念ながら日本にサソリは2種しか生息しておらず、いずれも南西諸島にしかいないため見ることは簡単ではない。

しかし、意外なことに蛍光する生物は我々が思っている以上に身近にたくさんいるようだ。例えば、写真のミドリババヤスデ（ニクイロババヤスデ）は少なくとも日本産サソリ2種よりはるかに明るく蛍光する。日の光に当てると青色みを帯びて見えるのに、室内だとただ黒く見えてしまうほどだ。

ほかにも、昆虫やクモ、ザトウムシの一部も蛍光するようである。彼らが光るメカニズムについては分かってきたのだが、その理由については未だ解明されていない。隠れられる空間を探すためか、彼ら同士認識しあうためか、はたまた日焼け止めクリーム代わりなのだろうか……。（写真・文＝桒原良輔、生物2年、野生動物研究会）

春季関東大学１部リーグ

女子 接戦制し３連覇

【葛飾区水元総合スポーツセンター（東京都葛飾区）で佐々木悠里＝人文学類2年、堀江航介＝社会学類1年】6チームが団体戦で争う春季関東大学1部リーグが4月29日から5月5日に行われた。昨年のリーグ戦では春秋共に制し、全日本学生選手権でも優勝した女子は、4勝1敗で法政大、日本体育大と並んだが取得ゲーム数で2位の専修大を「1」上回り、リーグ3連覇を達成した。また、最優秀選手賞に加藤美幸（体専3年）が選ばれた。男子は0勝5敗で6位に終わり、5月8日の入れ替え戦でも明治大学に敗れ、2部に降格した。

息のあったプレーをみせる加藤（左）、柏原（5月5日、早稲田大戦で）＝堀江航介撮影

バドミントン

女子は5月5日の最終戦で、早稲田大と対戦。4－1で勝利し、優勝を決めた。

第1シングルスで大久保敦美（同4年）が2－1で勝利、第2シングルスで安田美空（同1年）が1－2で落として迎えた第1ダブルスには、昨年10月の全日本学生選手権で優勝した加藤美幸（同3年）、柏原みき（同3年）ペアが出場。柏原が連続でスマッシュを打ち、加藤が隙をみて正確なプッシュで決める息の合ったプレーで得点を重ね、第1ゲームを21－17で先取した。

しかし第2ゲームは「集中力が切れた」（加藤）ためミスが増え、15－21で落とした。だが第3ゲームは再び相手を圧倒、21－13で勝利を奪った。

第2ダブルスでは綿矢汐里（同4年）と安田のペアが挑んだ。1ゲーム目は相手のスマッシュに対応しきれず、14－21で落としたが、第2ゲーム、第3ゲームは接戦を制し、21－19、21－17で逆転し、試合の勝利を決めた。最終戦の第3シングルスでは加藤がネット際のショットを効果的に使い2－0でストレート勝ちした。

鋭いスマッシュを打つ安田（左）と、綿矢（5月5日、早稲田大戦で）＝堀江航介撮影

観戦記

ショットの正確さ課題

リーグ戦3連覇を達成した筑波大学だが、5月3日の日本体育大戦で敗れたことへの悔しさはもちろん、勝利を収めた早稲田大戦でも、選手たちから聞こえていきたのは反省ばかりだった。

第1ダブルスに出場した柏原みき（体専3年）は「1セット目は普段通り戦えたが、2セット目は相手に左右に展開されてミスショットを重ねてしまい、思うように得点できなかった」と話した。また、柏原とペアを組む加藤美幸（同3年）も「良かったがチームの軸。1ポイントでも多く取る責任があった」と苦い表情を浮かべた。だが、そんな中でもリーグ優勝を勝ち取れるのが、全日本学生王者の底力だ。

力強い新入生も加わった。早稲田大戦の第2ダブルスで接戦を制した安田美空（同1年）は修正能力の高さを見せた。

吹田真一監督（体育系・助教）は「相手の分析をして、対応できるだけの体力と自信を備えて臨めたことが勝因」と話した。

安田は3日、4日の試合で連敗し「シャトルの際に後ろに引き気味で、相手に立て直す時間を与えてしまっていた」と反省。早稲田大戦では「前へ出ることを意識し、より低く早い球で相手に返せるよう、レシーブをなるべく上で受け攻めた」ことで、勝利をもぎ取った。

柏原は「リーグ優勝はあくまで通過点。目標は学生の大会だけでなく、世界で戦える選手になること」と話す。

向上心を忘れない彼女たちに、秋への成長を期待したい。10月の全日本学生選手権3連覇、またその先にある全日本選手権に向けたゆまぬ努力の日々は続く。

（佐々木悠里）

春季関東大学女子１部リーグ

首位との差、僅か

【青山学院大学記念館（東京都渋谷区）で佐々木悠里＝人文学類2年、写真も】10大学で行われる春季関東大学女子1部リーグが4月17日から青山学院大学記念館で開催されている。昨年春秋制覇を果たした筑波大学は今季も好調を維持し、5勝0敗で同じく無敗の首位、東海大と1セット差の2位につけている（5月13日現在）。

敵のブロックの上からスパイクを打つ朝日（4月24日、日本女子体育大戦で）

全員でボールつなぐ

バレー

4月24日の日本女子体育大戦では、全日本代表の井上愛里沙（体専3年）や、朝日優衣（同4年）の活躍で接戦を制し3－1で勝利した。

序盤は個々の力の強い筑波大が、相手にリードを渡すことなく、25－15、25－19で2セットを先取。だが第3セットになると日本女子体育大が筑波大の攻めに対応し始め、スパイクを拾われるように。逆に相手の思い切りのいいスパイクに苦しみ、22－25でこのセットを落とした。

第4セットも3セット目の流れが続いたが、筑波大の選手は正確なレシーブやトスで、得点につなげた。日本女子体育大がサーブミスを重ねたことも助けられ、25－22で振り切った。

開幕5連勝と波に乗る筑波大だが、苦悩も多い。全日本代表の合宿やけがで離脱している選手が多く、ベストメンバーでの試合はできていない。試行錯誤を続けており、23日の早稲田大戦では選手交代やポジション変更が目立った。本職のレフトでなくライトで出場した井上は「スパイクのコースなどがいつもと違うため、対応しきれない時もあった」とその難しさを話した。

だが、中西唐己監督（体育系・准教授）が好調な選手を見極め、安定した強さを保っている。24日の日本女子体育大戦では、早稲田大戦の様子を踏まえ、コートに立つメンバーをほとんど固定。チームもまとまりを見せ、拮抗した戦いが続いた第4セットでは、際どいボールも全員が必死に追い拾い続ける粘りのプレーで、日本女子体育大を振り切った。

中西監督は、「ブロックの付き方など課題はあるが、最後（第4セット）は普段の練習の成果を出せた。だが現状に満足せず、攻撃のパターンを増やしていきたい」と話した。

加納が準優勝

関東学生選手権

剣道

【日本武道館（東京都千代田区）で石川泰行＝社会学類2年、写真も】関東学生選手権が5月8日に行われ、加納彰大（体専4年）が準優勝に輝いた。8位入賞を果たした田内雄大（同2年）、敗者復活戦で勝ち上がった筒井雄大（同3年）とともに6月に行われる全日本学生選手権への出場権を獲得した。

昨年10月の団体戦、全日本学生優勝大会の優勝メンバーだった加納。初の全日本学生選手権出場を目指し、勝利を重ねた。

鍋山隆弘監督（体育系・准教授）が、「春頃からとても調子が良い」と話す加納は準々決勝で世界選手権の代表経験者、明治大の山田凌平（2年）と対戦。試合開始直後にメンを決められたものの、粘り強く攻めてコテ、そしてメンを決め、逆転勝利で準決勝に駒を進めた。

相手の様子をうかがう加納（5月8日、準決勝で）

続く準決勝の相手は、2年連続で全日本学生選手権の決勝に進出している中央大の梅ヶ谷翔（3年）。試合は延長戦に入ってもつばぜり合いが続く膠着気味の展開に。だが、梅ヶ谷の竹刀を交換するために試合が中断され、その再開直後、一瞬の隙を見逃さず、飛び込みメンを決めて一本勝ちした。

決勝戦では国士舘大の矢野貴之（2年）に、逆胴を仕掛けた際に逆に引きメンを決められ、敗北した。

試合後、加納は、「今までは全日本に出場できなかったので出場権を獲得できてうれしい半面、決勝まで行って優勝できなかったのは悔しい。全日本では昨年林田匡平さん（平成27年度体育専門学群卒）が日本一になっているので、自分も優勝目指して頑張りたい」と語った。

また、鍋山監督は、「全日本出場の目標を達成できた。団体戦のメンバーの参考にもなる大会だった。加納は強くて頼れる1つ上の代が卒業して、キャプテンとしての自覚や責任感が出てきた。全日本に出場する3人はみんな頑張っており、期待している」と話した。

能智が初優勝

全日本選抜体重別選手権

柔道

全日本選抜体重別選手権が4月2－3日に福岡国際センター（福岡市）で開催された。女子63㌔級で能智亜衣美（体専3年）が初優勝、津金恵（同3年）が準優勝に輝いた。

能智は準決勝まで、技ありや有効を収め、順調に勝ち上がり、決勝では津金と対戦。同門対決となった。能智は、序盤から積極的に足技を仕掛けるなど力強さを見せ津金を圧倒。残り1分32秒、仕掛けた足払いで有効を勝ち取った。その後、能智は、一度指導を受けるものの、相手に技を決めさせず、優勝を決めた。

能智は「自分のペースに持ち込んでから技をかけるまでの速度を上げる練習をしてきた。練習を生かし、自分の実力を証明できてうれしい。今後は国内大会で勝ち続けて世界選手権を目指したい」と語った。

また、今年3月に卒業した永瀬貴規（旭化成）が男子81㌔級で連覇を果たし、大会後、リオデジャネイロ五輪日本代表として選出された。

（加藤未悠）

◆

永瀬貴規（ながせ・たかのり）

1993年10月14日、長崎県生まれ、22歳、81㌔級。今春から旭化成に所属。

関東大学選手権

57年ぶり5回目の優勝

最優秀選手賞に馬場

【国立代々木競技場第一体育館（東京都渋谷区）で大西美雨＝社会学類3年、写真も】関東大学選手権が4月23日から5月8日まで行われ、2年連続で準優勝に終わっていた筑波大学は、決勝で拓殖大と対戦。77－69で勝利し、57年ぶり5回目の優勝を果たした。最優秀選手賞に馬場雄大（体専3年）、優勝選手賞に杉浦佑成（同3年）、満田丈太郎（同4年）が選ばれた。

シュートを決める満田（5月8日、拓殖大戦で）

バスケ

準決勝の早稲田大戦では得点を3桁の大台に乗せるなど、順調に決勝に駒を進めた筑波大。決勝では、昨年の覇者の東海大を準決勝で破った拓殖大に、前半はペースを握られたものの、後半は持ち味の速攻で突き放した。

前半、筑波大はパスカットからの素早い攻撃を展開したが、シュートミスが目立ち、流れを掴みきれなかった。一方拓殖大は筑波大のリバウンドを拾い続け、そこから得点につなげた。第2ピリオドでは拓殖大に3連続スリーポイントシュートを決められる場面もあったが、筑波大は満田がフリースローを決めるなど細かく得点を重ねて食い下がり、34－35で前半を折り返した。

第3ピリオドに入ると、満田が果敢に攻め、連続4得点をあげた。また、ディフェンスを強化し、拓殖大の得点を9点に抑え、49－44で第4ピリオドへ。馬場のダンクシュートで勢いに乗った筑波大は、波多智也（同2年）や杉浦など他の選手もそれに続き、一時、点差を2桁に広げた。相手にリードを譲りそうになると、すかさずタイムアウトを取って流れを断ち切る策が功を奏したこともあり、77－69で勝利した。

キャプテンの生原秀将（同4年）は、「相手のゆっくりしたペースに乗せられ、自分たちの速いテンポで攻撃回数を増やすプレーに上手くつなげられず苦戦したが、勝利できてよかった。控えの選手のレベルも高く、誰が試合に出ても勝てるチームになってきている」と話した。

吉田健司監督（体育系・准教授）は、「優勝できてうれしいが、試合の流れを引き寄せる場面でミスが増え、相手と点差をつけることができなかった。反省点が残る試合だった」と語った。

第6節時点でリーグ1位
強豪明治大と引き分け

守備を振り切り、ゴールに迫る中野（4月23日、明治大戦で）

サッカー

【川口市青木町公園総合運動場（埼玉県川口市）で小宮山瑛生＝社会学類2年、写真も】サッカーの関東大学リーグが4月3日から開幕した。昨年、2部降格から1年で1部復帰を成し遂げた筑波大学は、第6節を終えた時点で3勝1敗2分けとし、得失点差で12チーム中1位につけている。

4月23日には昨年のリーグ戦で準優勝した強豪、明治大学と対戦。一進一退の攻防を繰り広げ、2－2と引き分けた。

試合は序盤から大きく動いた。前半7分、相手選手が抜けたところをスライディングで止めたがファールの判定に。このプレーで与えたフリーキックを直接決められ明治大に先制を許した。何とか追いつきたい筑波大は前半27分、スローインから右サイドでの攻撃を開始。戸嶋祥郎（体専3年）がゴール前に上げたボールを中野誠也（同3年）が頭で合わせ、同点ゴールを奪った。両チーム多くのチャンスを作りながらも1－1で前半を折り返した。

後半に入ると、立ち上がりから攻め込まれ、ゴールを決められてしまう。逆転を狙う筑波大は、後半24分、エースの中野を足の負傷で欠くも、エースの不在を埋めるような体を張った好守で、明治大に追加点を許さなかった。後半45分、コーナーキックでゴール前に上げられたボールを途中出場の高柳昂平（同4年）が頭で合わせゴール。試合は2－2の引き分けに終わった。

小井土正亮監督（体育系・助教）は試合を振り返り、「積極的にゴールへ向かう姿勢が見られた。今回ゴールを決めたのもそうだが、交代選手もみな大きな戦力となっている。目の前の試合に集中して勝ち点を取っていきたい」と話した。

記録ファイル

◆柔道　アジア選手権大会（4月15－17日、ウズベキスタン）
【男子】▽90キロ級　小林悠輔（平成27年度体育専門学群卒）＝準優勝
【女子】▽66キロ級　津金恵（体専3年）＝準優勝
◆陸上　第5回AEARU学生競技大会（4月23日、台湾）
【男子】マラソン（12・5㌔）▽武田勇美（人文3年）＝優勝▽田内誠人（体専4年）＝準優勝
◆漕艇　第59回五大学レガッタ（4月29日、埼玉県戸田ボートコース）
【女子】▽ダブルスカル＝優勝
◆弓道　第24回関東学生弓道選手権春季トーナメント決勝大会
【男子】▽団体＝ベスト8

ソロホームランで先制
リーグ2位と好調

4回表にヒットを打つ森永（4月23日、城西大戦で）

野球

【サーティーフォー相模原球場（神奈川県相模原市）で前之裕＝社会学類2年、写真も】6チームが総当たりで戦う首都大学春季1部リーグ戦が4月2日から行われている。5月8日現在、筑波大学は7勝3敗で2位と好調。

4月23日に行われた城西大戦では打線が不調で投手を援護できず、また守備のミスもあり最終回に逆転され2－3で敗れた。

初回に先頭の森永康介（体専3年）のライトスタンドへのソロホームランで先制。だが、その直後の1回裏に先発の石黒敦也（同4年）がツーアウトから二塁打を浴び、続く打者にライト方向へ打球を運ばれ、同点に追い付かれた。

4回に種子島大輝（同2年）のライトスタンドへのソロホームランで2－1と城西大を放したが、5回から打線は低迷した。得点圏に走者を進めても後続打線が次々と凡退し、追加点を得られなかった。

石黒は初回から安定した投球を見せ奮闘。何度も得点圏に走者を置くピンチをむかえたが、四死球のない安定した投球で乗り越え、初回以降を無得点に抑えた。

だが、9回に交代した大道琢拓（同3年）が相手打線に捕まった。先頭打者を味方の守備のエラーと盗塁で二塁まで進ませた後、二者連続で二塁打を浴び、逆転サヨナラ負けを喫した。

川村卓監督（体育系・准教授）は試合後、「追加点のチャンスは多かったが、打線がつながらず生かせなかった。また9回に投手を代えたのも誤算だった」と話した。

顔

大学からプロ入り目指す

2015年春のセンバツ甲子園でキャプテンとして敦賀気比高校を率い、北陸勢初の春のセンバツ優勝に導いた。「優勝はあくまで結果。目の前の試合に全力で臨み、確実に勝つことを重視した。優勝は最高の思い出だ」と笑顔で振り返る。身長は168㌢と野球選手の中では小柄だが、打撃力と持ち前のリーダーシップが強みだ。

静岡県出身。いとこや兄が楽しそうに野球をする姿を見て育ち、気付けば野球を始めていた。小学生のときは軟式の少年野球チームに所属した。中学に進学後は、「より高いレベルで戦いたい」と思い、軟式より高いレベルを目指す選手の多い硬式に転向。進学先の中学には硬式の野球部が無かったため、地元の硬式野球のクラブチームに加入した。

元敦賀気比高校野球部キャプテン

篠原 涼（体専1年）

中学卒業後は、クラブチームの監督の勧めもあり、親元を離れて福井県の強豪、敦賀気比高校へ。

「高校は部員数が多いのが小中との違い。その中で チームの中心として活躍するには、コミュニケーションが重要だ」と考え、多くの部員と幅広く交流した。また「監督やコーチに指示される前にするべきことを考え、行動していた」と振り返る。

高校野球の世界一を決める「U-18ベースボールワールドカップ」でも日本代表の主将を務めた。

オコエ瑠偉（楽天）や平沢大河（ロッテ）など甲子園ではライバルだった選手らと頂点を目指した。「選手一人ひとりのプレースタイルや考え方が異なる中、チームをまとめるのは大変だった」と振り返りつつも、三塁手としての気合の入ったプレーでチームを牽引。決勝戦で昨年優勝のアメリカに1－2で敗れたが、好守と10安打8打点の活躍が評価され、同大会のポジション別の最優秀選手「ベストナイン」に選ばれた。

高校卒業後は「今のままではプロでは通用しない。大学で成長し、プロを目指そう」と思い、筑波大学を選んだ。筑波大は設備が充実している上、打撃や守備などの動作を細かく分析し、他の大学ではできない指導を行っている。「ここなら成長できる」と感じた。

目標とする選手は松田宣浩（ソフトバンク）や森友哉（西武）などの、安定した守備と小柄ながらも力のある打撃が武器の選手。

「打撃時に球を芯で捉えるのが苦手」。課題は技術不足が原因の安定感に欠けるプレーだ。「大学では技術の向上を第一に、攻守ともに安定したプレーを目指したい」。

指導者になることも視野に入れ、教員免許を取得する予定だが、将来の目標はあくまで「プロ入り」。「体が小さくてもプロの世界で活躍できると証明したい」（前名裕一＝社会学類2年、写真は硬式野球部提供）

直接注意でマナー改善

本紙ルポ　短期留学生向け宿舎

今年度から一の矢学生宿舎の6棟計324部屋が、短期留学生を対象としたショートステイハウスとなり、その利用が始まった。一部が改装されたうえ、全室に本棚、カーテン、冷蔵庫などの家具・家電一式を装備。全ての管理を民間業者に委託するなどの新たな試みも行われている。実際に宿舎を訪ねた。

まず驚いたのが入居者のマナーの良さだった。一般の宿舎と違い、廊下や調理場などの共用部分に入居者の私物が一切置かれていないのだ。管理会社によると、当初は廊下に洗濯物を干すなどした入居者もいたが、本人に直接注意をしたことで改善された。

また管理会社が掃除や巡回を毎日行うことで、清潔な宿舎を保つことが出来ている、ともいう。騒音などのトラブルや居室に部外者を連れてくる入居者も、今のところ皆無だ。

8畳半ほどの部屋を見せてもらうと、冷蔵庫以外にもガスコンロや時計なども揃っている。管理会社は掃除機やアイロンなどの貸し出しも行っており、身一つで入居できるのは滞在期間の短い留学生にとって非常にありがたい仕組みだ。アイロンなどの貸し出しは、1日に約10人が利用するという。各部屋にはシャワー、トイレも完備している。

だがこれらの設備のため、利用料は通常の宿舎の月約1万5000円が、月3万6000円前後と高くなる。無論、この利用料も、近隣のアパートの家賃を考えると決して高くはない。

一般の宿舎については、そのマナーや住環境の悪さが指摘されて久しい。だがショートステイハウスはこれらの問題点を解決しつつあるように感じる。これは民間業者への管理委託が理由なのかもしれない。

気になる点もある。入居率が37%と低いのだ。留学生が多く入学する9月には入居希望者の増加も見込めるというが、現在は暫定的に入居希望の日本人学生も受け入れ、空室を埋めているという。ショートステイハウスの運営は、夏以降にその真価を問われる。

現在、平砂地区では日本人学生と留学生が同居するグローバルレジデンスも建設中である。来年4月から利用が始まる同宿舎もショートステイハウスと同じ民間企業が管理を担う。

（徳永巽、写真も）

私物が一切放置されていない廊下（5月2日、一の矢学生宿舎34号棟で）

筑波大への投票所誘致

若年投票率の向上目指し学生が尽力

大学生と政治

【1面参照】今夏の参院選から筑波大学に期日前投票所が設置される。山寺恭平さん（社学3年）らは昨年10月から筑波大の永田恭介学長や、つくば市選挙管理委員会に筑波大構内での投票所設置を求めてきた。山寺さんは「設置の実現を機に（大学生など）若年層の投票率が向上してほしい」と話している。

本紙が2015年1月に行ったアンケートでは、14年12月の衆院選での筑波大生の投票率は約40%と、全体の平均より約12%低かった。また、つくば市によると筑波大周辺の投票所での投票率は、市全体の投票率に比べ30%近く低いケースが過去あったという。

山寺さんは、かねてからこれら若者の投票率の低さを問題視。また学生の一連の反安保法制デモを見て、「デモを行う前に、なぜまず若者は投票に行かないのか」と疑問に思った。このため大学に期日前投票所を設置することで、気軽に投票できる環境を作り、若年投票率の向上を考えた、という。

これを受け昨年10月、仲間の学生とT-ACTで「投票所設置プロジェクト」を企画。18歳に選挙権年齢が引き下げられる今夏の参院選での大学内での設置を目指し、活動を始めた。

この中で山寺さんらは何度もつくば市選挙管理委員会を訪れ、陳情したほか、SNSを使い「筑波大に期日前投票所があれば利用したいか」とのアンケートも実施。つくば市に住民票があると答えた学生のうち、「利用したい」と答えた学生が95%に上ったのを受け、2月中旬には筑波大の永田恭介学長を訪れ、学内での設置を要請した。大学側もこれを了承している。

3月末、つくば市選挙管理委員会を訪れた際、同委員会はつくば駅前の「Bi V-つくば」のみに期日前投票所を設ける意向だった。だが今回、筑波大での設置が決まったと山寺さんは「設置が実現しうれしい。これで投票できる手段は整ったので、今後は若年投票率の向上向けさらに活動していきたい」と話している。

（大西美雨、写真も）

政治について熱く語る山寺さん（5月2日、1A棟で）

若者の政治参加

1年生が議論

筑波大学社会学類の新入生を対象にしたフレッシュマンセミナーで4月27日、投票率向上のための授業が行われた。授業で選挙の投票を呼び掛ける試みは初めて。

授業は2部構成で行われた。前半は、茨城県選挙管理委員会の青木祐人さんが出前授業を行った。年代別の投票率や候補者を詳しく知る方法、選挙に行く大切さなどについて話した。学生の意見を求める場面もあり、青木さんの「選挙権を持てることがうれしいか」という問いに、「うれしい」という意見と「面倒だ」という意見に分かれ、選挙に行くことの大切さを実感できていない人が少なからずいることが浮き彫りになった。

後半は、若年投票率向上を目指して活動をするNPO法人ドットジェイピーの谷口ほのかさん（社学2年）らが取り仕切り、次の参議院選挙の争点と予想される安全保障条約と消費税増税の賛否についてグループに分かれて議論を行い、政治への関心を深めた。

参加した学生は「若年層の意見が政治に反映されていない現状に危機感を覚え、投票意欲が高まった」と話した。

青木さんは「今回の授業が、学生たちが選挙に行くきっかけとなってほしい」と語った。こうした選挙啓発の取り組みは6月に比較文化学類のフレッシュマンセミナーでも行われる予定だ。（石川泰行、12面に関連写真）

学生がG7応援イベント

最先端の技術と音楽発信

G7茨城・つくば科学技術大臣会合開催記念イベント「INNOVATION WORLD FESTA 2016 Supported by CHINTAI」が5月14日に大学会館で開催された。

最先端の科学技術と音楽を世界に発信すると共に、一般の人や学生にも楽しんでもらうことが目的で、現代美術家のスプツニ子！さん、音楽家の小室哲哉さんなど各界の著名人が集結。トークセッションやパフォーマンスが満載の充実したイベントとなった。

このイベントを企画・運営したのは澤田悠太さん（社工専攻1年）。大学1年生の時、アメリカの学生が立ち上げた「サウス・バイ・サウスウエスト」という音楽やITなどを複合した大規模なイベントに参加した際、イベントの影響力の大きさに驚き、「つくばでも音楽とテクノロジーの魅力を融合させたフェスティバルを開催したい」と考えた。

しかし、実現の機会はなかなか訪れなかった。そんな中、澤田さんが所属していた音楽イベントの企画などを行う学生団体の活動で東京のFMラジオ局「J-WAVE」を訪れた際、社員の人と意気投合。同局の社員らと共に、筑波大学での大規模イベントの実現に向けて動き始めた。

昨年7月には筑波大の永田恭介学長に企画のプレゼンテーションを行った。イベントの利点などについて力説し、学長は快諾。イベントの開催が決定した。その後、スポンサー獲得の営業や、イベント内容の充実などの準備を進めてきた。

当日は学生パフォーマンスなどの統括役として活動。「力を貸してくれたすべての人に感謝したい。イベントが、つくばに新たなビジネスや文化が生まれるきっかけになればうれしい。今後もつくばをイノベーションが生まれる街として盛り上げたい」と話した。（深作歩美、写真も）

イベント開催に向けて話し合う澤田さん（右）（4月29日、5C棟で）

留学生のルーツに理解を

留学生の目

ロッシン・アンジェリカ

エキゾチックな南米の国ブラジルから来た留学生として、私は日々多くの質問をされる。

「ブラジルと日本の違いは？」「日本のどこが好き？」このような質問は慣れているし、構わない。それどころか、自分の国に興味を持ってくれているとわかるので、うれしかったりする。しかし、その興味の中に、私たち留学生を悩ませることがあるのを、日本人学生たちは知らない。

それほどの国の大学にも存在している（ブラジルも、残念ながら例外ではない。言葉は少し強いかもしれないが、「無知」という名の悩みだ。誤解しないでほしいが、私は日本人学生の悪口を言うつもりはみじんもない。筑波大学では全世界から集まってきた留学生たちが勉強している。その誰もが日本が好きで、そして筑波大を大変気に入っている。もちろん私もそうだ。日本人学生たちはとてもよくしてくれる、と彼らがうれしそうに言うのをよく聞く。

私がここで言いたいのは、私たち留学生の悩みに目を向けてほしい、という訴えである。先ほども言ったとおり、筑波大の留学生たちは、みな違う国から来ている。理解してほしいのは、すべての留学生が同じではない、ということ。特に言語の意味では、半分以上は英語のネイティブではない。中には、英語がとても苦手な留学生もいるのだ。間違えても「日本人学生より簡単でしょ」などということは絶対言わないでほしい。すらすら喋れる留学生も、かつては初めて新しい言語の教科書を開いた時期や、どうしても言葉がわからずイライラした時期もあったと思うが、私たちは長い道のりを経て喋れるようになったのだ。それは決して簡単ではない、と私は断言できる。

もうひとつ理解してほしいのは、いくら日本文化が大好きでも、私たちのルーツは海の向こうにある。このすばらしい国の規格には完全に当てはめられない。日本人の標準で私たちの性格や外見を判断したら、私たちのクオリティがくずんで見えなくなってしまう。

個人的な経験からの例として、体のサイズがある。日本の女性の美しさはどれだけやせているかによって決まるが、ブラジルではどれだけ丸くてくびれがついているかによって決まる。どれが正しくてどれが間違っているというのは関係ない。

ただ、現在の世界では「そう」なのだ。しかし、心もないコメントがよく私の周りに飛ぶ。言っていいことと言ってはいけないことの区別がわかっていないのだ。もちろん、留学生が全員この問題で悩んでいるというわけではない。けれど、問題は実際に存在するのである。

私たち留学生はこの国が大好きで、日本人たちと仲良く暮らしていきたいと思う。そんな私たちのために、少しこれらの面を考えてみるのは、どうだろうか？（心理学類2年＝ブラジル出身、原文も日本語）

「危険な道 明るくなった」

街灯設置を喜ぶ声多数

筑波大学のすぐ北にある防災科学技術研究所（つくば市天王台）が3月、東大通り沿いの敷地周辺などに街灯24基を設置した。同研究所付近は、以前から夜間の暗さが危険視されており、地元住民には明るいニュースになった。設置から1カ月、現場の状況はどうなっているのか。実際に歩き、人々の声を聞いた。（徳永翼）

未設置区間も

5月上旬の平日、午後7時過ぎ。日没後に、同研究所そばの東大通りを一ノ矢交差点から花畑2丁目に向かって歩いた。人通りは少なく、たまに自転車の人やバス停を利用する歩行者が通る程度。一人で歩くには若干怖い。

だが救いは新設の街灯だった。同研究所前の約500㍍は設置された街灯のおかげで100㍍先までが見える。バイト先に通うためにこの道をいつも利用する長瀬利勝さん（教育2年）は街灯がついたおかげで、凹凸がある道を自転車で通りやすくなった」と設置を喜ぶ。

街灯が設置され、明るく照らされる歩道（5月3日、防災科学技術研究所前で）＝新田萌夏（社会学類4年）撮影

だが、同研究所から東大通りを南下すると、台坪交差点まで筑波大学の敷地沿いに1㌔㍍弱、また街灯の無い区間がある。この付近の筑波大側の敷地内には、一の矢学生宿舎がある。同宿舎に住む男子学生は「街灯がなく暗いので通るのが怖い。男の自分でも不審者が出ないか心配しながら通っている」と話す。

近隣の花畑地区の自治会長を務める塚本一也さんは、「以前から市や研究所に街灯設置を求めていたので、街灯が設置されてうれしい」と喜ぶ。だが家本さんは、「付近には依然として暗い場所も多く、危ない。道路が暗いため街路樹の木の根を踏んでバンクする自転車もある」と話していた。

記者の目

現場の取材で、「東大通りはつくば市の主要道路だが、暗くて怖いので利用しないようにしていた。街灯がついて良かった」という声を数多く聞いた。防災科学技術研究所が街灯を設置したことで人通りが増えれば、犯罪の危険も減るだろう。

今回の設置では同研究所が設置費や維持管理費を負担した。コミュニティの構成員が資金やさまざまな知恵を出し合うことで、つくば市で街灯設置が進み、安心して、そして犯罪発生の懸念なく歩ける道が増えることを願う。同研究所の英断に感謝したい。

つくば市には今後、街灯を設置することに加え、街路樹を剪定するなど安心して歩けるまちづくりを進めてほしい。（徳永翼）

街灯が設置された場所（―）

バイオeカフェ100回目

生殖細胞の面白さ語る

軽食をとりながら最新研究の話を聞く「バイオeカフェ」が、4月12日に第二エリア小食堂で行われた。100回目。小林悟教授（TARAセンター）が「永遠の命を持つ生殖細胞にひそむ不思議と研究の面白さを語る」と題し講演した。

2006年から生物学類と生命環境科学研究科が企画・運営しており、今回で

小林教授は、ハエが受精卵から成虫になる過程で働くタンパク質などを、約30年間研究してきた。講演では、ハエの生殖細胞が世代を越えて受け継がれる仕組みを説明し「なぜ細胞は死なずに機能し続けられるのか」と参加者に質問。参加者はテーブルごとに意見を交換し、考えを発表した。

最後に小林教授は学生に向け「研究には独創的な発想が必要だが、常識を知らなければそれは生まれない。今はしっかり知識をつけてほしい」と語った。

参加した生物学類の女子学生は「先生の研究の経緯も聞けたので、授業で学んだ時より深く理解できたと思う」と話した。

（添島春苗＝生物学類4年）

夜桜を楽しむ会

筑波大生が企画

筑波大学生が中心になって企画・運営した夜桜を楽しむイベント「夜桜之宴」が、4月2日に千波公園（水戸市千波町）で開催された。

同イベントは江戸時代の桜景色を復活させようと筑波大生や水戸市民などが進める「水戸桜川千本桜プロジェクト」の一環で行われた。普段と違う雰囲気で桜を楽しんでもらうことが目的で、来場者は夜桜を楽しんだ後、料亭に移動し料理を堪能した。長唄の演奏も披露され、会場は優美な雰囲気に包まれた。

同プロジェクトのメンバーの宮谷瑛香純さん（社工2年）は「今後も地域とのつながりを大切にしながら活動していきたい」と話した。（前名裕一）

パラグアイで陸上競技を指導

大学院の水島さん ネットで資金集め

筑波大学大学院の水島淳さん（体育2年）は、青年海外協力隊としてパラグアイで陸上競技指導を行っている。現地の人に陸上の研修を行うため、4月から「筑波フューチャーファンディング（TFF）」で支援を募集。5月2日現在、目標金額の10万円を超えた募金が集まった。

パラグアイの陸上競技人口は非常に少なく、世界大会で活躍する選手は数人程度。そのため、陸上未経験の指導者が多く、指導法が適切でないこともある。また、発展途上国であるため海外遠征が難しく、選手の強化や陸上競技の普及が課題となっている。

水島さんがパラグアイに渡ったのは昨年7月。将来、指導者として日本の陸上競技発展に貢献できるように、海外でのコーチ経験を積みたいと考え、大学院を2年間休学し青年海外協力隊に応募した。渡航後はパラグアイの陸上競技連盟の一員として陸上競技の普及や、水島さんの専門で、パラグアイのお家芸でもある投てき種目の指導に力を注いでいる。また、陸上競技未経験者がコーチを務めているクラブで、日本で学んだ知識や経験を生かして指導している。

パラグアイで現地の選手に指導を行う水島さん＝本人提供

5月には、パラグアイの選手2人とコーチ3人と共に日本に遠征。静岡国際陸上などの大会に参加した。東京五輪への出場が期待される若手選手が初の国際大会出場となった。また、6日には筑波大を訪問。各陸上競技種目の専門家の講義を受け、日本の最先端スポーツ科学技術を学んだ。

今後は、日本遠征メンバーと共に、日本で学んだことを教える陸上競技研修を展開する。また南米全土を巻き込んで、日本人選手を招いて講習会を開くなど、陸上競技に関するイベントを開催する予定だ。活動のため、TFFで15万円の支援を募っているという。

水島さんは、「スポーツは発展途上国の人も世界で活躍するチャンスがある。パラグアイに陸上競技を広め、国全体で盛り上がるように今後も活動を続けていきたい」と話した。（大西美雨）

歴史探訪会

その地の歴史 肌で感じる

あるく探訪 tanbō

「実際に現地に行かなければ、その地の本当の魅力は分からない」。副会長の桜木高大さん（人文3年）はこう話す。

日本各地の史跡や博物館を訪れるサークル。会員は33人で、多くが人文学類の学生だ。年10回ほど行う探訪の行き先は、高尾山や中尊寺などの有名な観光地から、戦前の政治家高橋是清の邸宅などマイナーな場所まで多岐にわたるが、どれも歴史と関係が深い。

5月7日の「築地・月島探訪」では、築地市場（東京都中央区）や波除稲荷神社（東京都中央区）など6カ所を巡った。記者も探訪に同行させてもらった。

庭園を楽しむ会員たち（5月7日、浜離宮恩賜庭園で）

特に会員が盛り上がったのは、浄土真宗の一派の寺院、築地本願寺（東京都中央区）。鈴木景祐さん（人文2年）は「普段から寺院を訪れるが、インドの石窟寺院のような外観は珍しく新鮮」と目を輝かせた。会員たちは外観の写真を撮ったり、寺のあちこちにある動物の彫刻を探したりしていた。

かつて徳川将軍家の庭園だった浜離宮恩賜庭園（東京都中央区）では、カモの狩猟が行われていた「鴨場」を見学。カモの様子を観察するのぞき穴から堀を眺めたり、カモのおとりのアヒルをおびき寄せる木槌を鳴らしたりして楽しんだ。また、一人が園内の銅像を見つけると他の会員もすぐ集まり、モチーフの人物の説明を夢中になって読んでいた。

こうして探訪が盛り上がる秘訣は、事前に行う「調査」にある。

週2回のミーティングで探訪の大まかな行き先を話し合った後、担当者が探訪当日の「しおり」となる計画書を数カ月かけて作成する。計画書には集合時間や巡る名所、交通手段が細かく記されている。

以前四国探訪の計画書を作った仙臺森大さん（人文2年）は「調べることが多く大変だが、その土地の思わぬ歴史を知ることができて面白い。良い計画書ができれば探訪もより楽しくなる」と話す。

会長の矢作早菜さん（人文3年）はサークルの魅力を「普段は行けない遠方を訪れ、歴史を肌で感じられるところ」と話す。その地に歴史がある限り、彼らは新たな発見とロマンを求めて、旅を続けていく。（佐々木悠里＝人文学類2年、写真も）

Who's Who?

サッカーの練習方法共有サイトを発案

木村友輔さん（体専２年）

地元の少年・少女サッカーチームへ指導を行う木村さん＝本人提供

「日本サッカー界を底上げしたい」。そんな思いが詰まったプロジェクトが実現に向け動いている。サッカーの練習方法について誰でも投稿でき、コメントもできるサイト「シェアトレ(仮)」を作るというものだ。

生まれも育ちも東京。幼少期からバスケや水泳、英会話などさまざまな習い事をした。中でも小学2年生の時に始めたサッカーが気に入り、中高はクラブチームに所属。昨年体育専門学群に入学し、迷わず蹴球部に入った。

同部では毎年、筑波大学周辺の少年・少女サッカーチームに部員を派遣し、指導を行っている。入部してすぐに指導に赴き、気付いたのは教えることの難しさだった。「教えている練習方法が正しいのか分からない。伸び盛りの少年たちに指導することに責任感を感じた」。初めて「指導者」の立場に立って感じた苦悩が、サイト設立のきっかけになった。

昨年の夏休み、骨折でサッカーができない時期があり、この期間を利用してサイトの作成を始めた。プログラミングなどの経験は全くなかったが、試行錯誤の末、簡易的なサイトを開設した。だが動画などの投稿ができず、投稿やコメントが行える会員の数にも限りがあった。けがから復帰したこともあり、サイトに関わることは次第に減っていった。

新たなサイト開設の転機になったのは昨年12月に参加した文部科学省の「アントレプレナー育成プログラム」。参加者でチームを作り、自分のアイデアを事業に結び付ける方法を学ぶものだ。学内に貼っていたチラシを見て受講を決めた。申し込みが間に合わず参加を断られたが「話だけでも聞かせて」と運営者に懇願し会場に入った。

指導で感じた悩みがきっかけ「サッカー界を底上げしたい」

他の参加者のアイデアを聞くうちに「自分も何か発表したい」と思った。そんな中、発表者に欠員が出て急きょ代わりに発表する機会を得た。準備はしていなかったが、けがをした際に作ったサイトを使用。スクリーンに映しながら自分の計画を語ると、参加していた学生エンジニア3人が賛同し、4人のチームを結成した。2人はサイトの構築、もう2人は宣伝活動を行う体制ができた。

もう一つの転機は、不特定多数の人から資金の出資や協力を得るサービス「筑波フューチャーファンディング（TFF）」を知ったこと。TFFの関係者に勧められ、サイト開設や宣伝のための資金を募った。筑波大の卒業生で、現在アビスパ福岡の監督を務める井原正巳さん（平成2年度体育専門学群卒）が賛同してくれたことも追い風となり、当初の目標額であった3万円は募集開始から7時間で達成。次の目標の6万円も2日間で達成した。「自分たちが進めているものがいかに社会に求められているかを感じた。喜びと同時に成功させなければいけない、という責任感を感じた」と振り返る。

このプロジェクトは、参加していた「アントレプレナー育成プログラム」で、プログラムが行われた2カ月の期間中に最も成長した企画に贈られる「グッドブラッシュアップ賞」を受賞するなど着実に評価されはじめている。その他にも茨城県の銀行が主催する、地域に潜在する革新的な事業プランに贈られる常陽ビジネスアワードで奨励賞を受賞。受賞者の多くが社会人の中での受賞は、大きな自信につながった。

現在は年内の運用開始を目標に、利用者のニーズをメンバーと話し合い、機能の改善に努めている。「自分の考えに賛同してくれた3人をはじめ、多くの支援者が納得してくれるサイトにしたい」。（小宮山瑛生＝社会学類2年）

編集後記

5月上旬、編集室にうれしいニュースが届きました。1面で報じた「筑波大学に期日前投票所ができる」というものです。設置は今夏の参院選から。2014年12月の衆院選以来の国政選挙です▼本紙はこの14年の衆院選の際、筑波大生を対象に投票率アンケートを行いました。結果は全国平均を大きく下回る約40％。この筑波大生の意外な投票率の低さを報じた319号（15年1月発行）は大きな反響を受けました▼一方、今回の投票所新設に大きく貢献したのは、ほかでもない筑波大生です。昨年4月に学内誘致を目指す学生団体が発足し、今年2月には永田学長から設置許可を取り付けました。行動力に頭が下がります▼今年は秋につくば市長選挙があるほか、衆参のダブル選挙が予想される「選挙の年」です。「選挙」をテーマに筑波大生の動きを追いたいと思います。（編集長・田中開＝教育学類3年）

次号は **7月11日（月）** 発行予定です

川村卓准教授の研究

9台の赤外線カメラを使用して打者のスイングを撮影する＝川村准教授提供

学内総合

1面へ

関東大学選手権優勝

優勝した筑波大男子バスケ部（5月8日、国立代々木競技場第二体育館で）＝大西美雨撮影

スポーツ

9面へ

授業で選挙啓発

今年の参院選で想定される争点について話し合う学生たち（4月27日、1日棟で）＝石川泰行撮影

学生生活

10面へ

ショートステイハウス

改装されたショートステイハウスの中庭（5月2日、一の矢宿舎35号棟で）＝徳永翼撮影

学生生活

10面へ